

中学校道徳 読み物資料集

平成24年3月



文部科学省

まえがき

教育は、人格の完成を目指すものであり、学校教育において、自らを律しつつ、他者と共に協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性をはぐくむことは大変重要です。

平成二十年一月の中央教育審議会答申では、生命尊重の心の不十分さ、自尊感情の乏しさ、基本的な生活習慣の未確立、規範意識の低下、人間関係を形成する力の低下など子どもの心の活力が弱っている傾向などが指摘されています。

平成二十年三月に告示された中学校学習指導要領においては、こうした課題を踏まえ、道德教育の充実・改善を図っています。具体的には、発達の段階に応じた指導内容の重点の明確化、生徒が感動を覚えるような魅力的な教材の開発や活用、道德教育推進教師を中心とした指導体制の充実、道德の時間の授業公開や家庭・地域社会との共通理解・相互連携などです。

本書は、新しい中学校学習指導要領の第三章道德を踏まえ、新設された内容項目、指導内容の重点項目及び情報モラルなどに関する読み物資料とその活用例を提供することとしたものです。

望ましい道德教材のあり方として、「子どもの興味・関心・共感を呼び、生きる喜び・夢や勇気を与え、人間としてよりよく生きることの意味を深く考えられるもの」、「人間尊重の精神や生命に対する畏敬の念にかない、子どもの発達段階や生活経験を踏まえ適切な内容・表現となっているもの」、「指導のねらいである道德的価値が明確にとらえられ、指導過程や指導方法を工夫しやすく、道德的実践意欲・実践力を高めるのにふさわしいもの」などが挙げられます。

道德の時間の目標の達成を図り、生徒に充実感をもたらすような生き生きとした指導を進めるためには、道德の時間の資料となる魅力的な教材を多様に開発し、その効果的な活用に努めることが重要です。各学校において、本書が活用され、学習指導要領の趣旨を生かした道德の時間の一層の充実が図られることを期待します。

最後に、本書の作成に当たり、多大な御協力をいただいた協力者ほか関係の方々に、心から感謝申し上げます。

平成二十四年三月

文部科学省初等中等教育局長

布村 幸彦

目次

第1章 読み物資料

(1)	町内会デビュー	2
(2)	スイッチ	8
(3)	ネット将棋	12
(4)	違うんだよ、健司	16
(5)	嵐の後に	20
(6)	言葉の向こうに	26
(7)	背番号10	30
(8)	帰郷	36
(9)	絶やしてはならない — 緒方洪庵 —	42
(10)	キミばあちゃんの椿	46
(11)	闇の中の炎	52
(12)	仏の銀蔵	56
(13)	鳩が飛び立つ日 — 石井筆子 —	62
(14)	ロックンローラー	66
(15)	真の国際人 — 嘉納治五郎 —	70
(16)	海と空 — 檉野の人々 —	76

第2章 読み物資料の活用例

(1)	町内会デビュー	84
(2)	スイッチ	85
(3)	ネット将棋	86
(4)	違うんだよ、健司	87
(5)	嵐の後に	88
(6)	言葉の向こうに	89
(7)	背番号10	90
(8)	帰郷	91
(9)	絶やしてはならない — 緒方洪庵 —	92
(10)	キミばあちゃんの椿	93
(11)	闇の中の炎	94
(12)	仏の銀蔵	95
(13)	鳩が飛び立つ日 — 石井筆子 —	96
(14)	ロックンローラー	97
(15)	真の国際人 — 嘉納治五郎 —	98
(16)	海と空 — 檉野の人々 —	99

付録 「道徳の内容」の学年段階・学校段階の一覧表

資料一覧

資料名	道徳の内容項目	ページ
町内会デビュー	1 - (3)	2
スイッチ	1 - (3)	8
ネット将棋	1 - (3) ※	12
違うんだよ、健司	2 - (3)	16
嵐の後に	2 - (3)	20
言葉の向こうに	2 - (5) ※	26
背番号 10	2 - (6)	30
帰郷	2 - (6)	36
絶やしてはならない 一緒方洪庵一	3 - (1)	42
キミばあちゃんの椿	3 - (1)	46
闇の中の炎	4 - (1)	52
仏の銀蔵	4 - (1)	56
鳩が飛び立つ日 一石井筆子一	4 - (2)	62
ロックンローラー	4 - (8)	66
真の国際人 一嘉納治五郎一	4 - (10)	70
海と空 一檜野の人々一	4 - (10)	76

※印の資料は、情報モラルについても取り上げている。

「第一章

読み物資料

」

町内会デビュー

昼下がりの通りを、パトカーがけたたましくサイレンを鳴らして走った。十分ほどして、町の広報車が来た。

「先ほど、田中町三丁目の川沿いでクマが目撃されました。外出は控えてください。」
幸いにも人に被害はなかったが、クマの出現で町中が大騒ぎになった。

あれから一年後、またクマの出現が予想される季節になり、町内会が公民館で開かれた。クマとの遭遇への不安を何とかしたいのだが、相手がクマでは決定的な方法があるわけではない。

「昔はこんなことはなかった。生活が変わったからかな。この間、テレビで、人間の住むところが山と直接つながったのがクマやイノシシや鹿やらが出る原因だと言っていた。」

長老の発言で、会場は妙にしんみりとなった。一呼吸の後、町内会長が立ち上がった。

「提案ですが、人間と動物との中間地帯があるといいということですので、共同作業で町と山との境の草刈りと掃除をしてみませんか。町内全域というのはとても無理ですが、せめて昨年クマの出た川沿いのあたりだけでも。私たちにできることは私たちでしませんか。」

町内会長の提案は採択され、緊急の回覧板が回された。今度の日曜日に一斉の共同作業である。各家庭から一人が作業に参加するのが町内会の決まりだ。

「明、今度の日曜日の共同作業、中川家代表でお願いね。」

母の言葉に、明の夕食の箸が止まった。

「ええっ、どうして僕なの。共同作業の時は、お父さんが帰ってくるじゃない。」

「そうだけど、今度のはクマ対策ということで、臨時の特別作業なの。年間予定で分かっているなら、お父さんに赴任先から帰ってもらえるけど、今回はもう仕事が入っていて無理だって。」

「だったら、お母さんが出れば。」

「それがねえ、パートが休めないの。何とかならないかと思ったのだけど、もうシフトが確定していて、皆さんに迷惑を掛けるわけにいかないし。」

「僕はまだ、中学生だよ。」

「もう中学生だから、大丈夫。申し訳ないけど、部活は休ませてもらってよ。ただの作業じゃなくて、クマ対策だから中学校のお役にも立つというものよ。感謝されてもいいくらいよ。」

「よくそんな理屈が出てくるよ……。知らない人の中での、いやだよ。」

いくらクマのこととはいええ、大人に混じっての作業など、どのような雰囲気か想像できない。浮いてしまっただけ居場所がなくて、おろおろしている自分の姿が目に見えかぶ。

「大丈夫よ。心配しないで。みなさん、面倒見てくださいから。明の町内会デビューね。」

家の事情を思えば仕方のないことも、理屈では分かる。だが素直にうなずけない。明は黙って台所を出た。

次の日、明は改めて母から共同作業への協力を頼まれた。

「明、日曜日の作業、お願いね。中川家代表だから、逃げられないわね。」

「逃げるって、どういうことだよ。」

明は、思わず大きな声になった。母は肩をすくめて言った。

「ごめん、ごめん。気にさわったかしら。励ましとお願いのつもりだからね。」

日曜日がきた。母は相変わらずの調子である。

「さあ、ぼちぼち集合の時間よ。お昼はカレーを作っておいたから、温めて食べてね。私もパートだから、そこまで一緒に行こうよ。最初の挨拶はしてあげるから。あつ、それは過保護か。」

「本気でひとごとだと思ってるだろ。」

明は、しぶしぶ腰を上げた。

集合場所の公民館前の駐車場に行くと、明はいきなり声を掛けられた。

「おつ、中川君の息子だな、ご苦労さん。頑張ろうな。」

明は面食らって、しどろもどろの返事をした。

「ええ、はあ、そうですが……。何で分かったんですか」

「同級生だよ。同級生の佐藤だよ。君は中川君とそっくりだから、すぐ分かったよ。いいなあ、君のような若い人が来てくれるのは。こっちにおいでよ。みんなに紹介するよ。」

あれよあれよという間に、明は中川家の代表だという紹介をされ、まわりを笑顔で囲まれた。

作業は、視界を妨げる立木の伐採、草刈りとゴミ拾いである。念のため、クマよけの音を鳴らしている。どうしようかと戸惑っていると、五軒先の吉田さんのおばあさんが目に入った。鎌の使い方が堂に入っているの、つい見とれていると、

「明くん。」

と、声を掛けてきた。

「草刈りなんかしたことないだろう。ほら、こんなふうにしてごらん。草を握った手元の近いところに鎌を

当てて、手前に引くように……。欲張って一度にたくさん草を握ると手をけがするから、ほどほどに……。そうそう、なかなか手つきがいいよ。若い者は飲み込みが早いね。」

褒められると元気が出る。ザクツ、ザクツといい調子で刈る。刈り取った跡が空き地のようにはつきりするので、いかにも仕事をしている気分が高まる。思わずペースが上がる。するとまた吉田さんから声が掛かる。

「張り切りすぎるとバテるよ。一定の調子で、リズムよく出来るくらいの力加減でやると疲れないよ。」

秋も終わりに近い季節であるが、汗が噴き出る。軍手をした手の甲で、額の汗を拭く。続けていると腰も痛くなってくる。腰をトントンとたたきながらふと周りを見ると、何人かの人が、刈り取った草を運んでいる。凸凹^{でこぼこ}で足元が良くないところで足をとられそうになる人もいる。

「よし。」

明は、あちこちに散らばっている切ったばかりの草や枝を集めて運び始めた。生の枝や束ねた草は思ったよりも重い。抱えて運ぶのは重労働だ。

「やあ、よく気が付いたなあ。助かるわ。」

明は、確かにこの仕事はお年寄りの仕事ではないと思った。

十二時を過ぎて、町内会長が作業終了をふれて回った。

「本日の作業は終了です。集まってください。」

再び集合した参加者に、町内会長が拡声器のマイクを持って、お礼の挨拶をした。

「どなたも、お疲れ様でした。おかげで、作業が予定通りに終了しました。これでクマが絶対に出ないというわけではありませんが、いきなりクマとぶつかる危険はずいぶん減ったと思います。今回は急なことでし

だが熱心に参加していただき、嬉しく思います。初めての参加の方もおられました。これを機会にお近づきになれば、ありがたいです。クマとの出会いはありませんが、こういう出会いは歓迎です。」

「クマみたいな者はいるぞ。」

という声も飛んだが、拍手が起きた。参加者には、大人にはビールとおつまみが、明にはパンとスポーツドリンクが配られた。明が帰ろうとすると、佐藤さんとお年寄りたちが寄ってきた。

「明君、今日は来てくれて、ありがとう。若い人がいると作業が早いわ。」

「そうそう。こっちまで元気になれるよ。中川家代表、お疲れ様。」

明は、くすぐったかったけれど、なんだか大人になったような気持ち持たがした。

帰宅した明は、カレーを温めて大盛りにした。いつもの母の味だとは思いつつも、ちょっと甘いのではないかと感じてソースをたっぷりかけた。

翌朝、明がいつものように玄関を出ると、吉田さんが家の前を掃いていた。いつもは頭をペコッと下げるだけの明だったが、小走りに近寄って自分から声を掛けた。

「おはようございます。」

「あら、明くん、おはよう。昨日はお疲れ様。腰が痛くならなかったかしら。」

「はい。なんとも。吉田さんこそ大丈夫ですか。」



その日、通学の途中で、明はあちこちから声を掛けられた。朗らかな声でそれに応えながら、明は、背筋を伸ばして、大股で学校に向かった。

スイッチ

中学校で卓球をやっていた絵里は、城南高校へ進学した。城南高校は、毎年インターハイに出場する強豪校で、顧問の坂先生は県内でも有数の指導者だ。絵里がこの高校を志望したのも、坂先生に指導してもらったためだ。予想以上の練習の厳しさに負け、入部してすぐに辞めてしまった者もいたが、多くの部員たちは、先生の言う通りにやっていたら、確実に強くなるという手応えを感じていた。

絵里が二年生になった六月上旬の地区大会で、城南高校は団体優勝した。絵里も、ただ一人の二年生のレギュラーとして、その一翼を担った。六月下旬の県大会に向けて、部員一同は以前にも増して練習に熱が入り、体育館には連日遅くまで明かりがついている。部員たちは県大会に勝ってインターハイの切符を手に入れようと燃え上がっていた。

ところが、県大会を三日後に控えて、練習に入ろうとした時だった。副顧問が体育館に現れて、みんなを集めた。

「実は、坂先生が緊急入院されることになった。高熱が出ているということだ。とにかくキャプテンを中心に、最後の仕上げをして県大会に臨んで欲しいという連絡があった。」

部員たちから、悲鳴ともつかない声が上がった。

「高熱って……大丈夫なんですか。」

「坂先生はいつ戻って来られるんですか。」

部員たちは矢継ぎ早に質問を浴びせかけたが、検査をしてみないと何も分からない状況ということだった。

しばらくの沈黙の後、キャプテンが立ち上がった。

「みんな、ともかくいつも通りに練習をしよう。」

その言葉に返事をし、絵里も卓球台に向かったが、なぜかミスばかりだった。

県大会が始まった。城南高校はシード校なので、観客席から一回戦の様子を見てみると、どの学校のベンチにも顔見知りの監督が座っている。絵里にとって、坂先生がいない試合は初めてだ。

試合が進み、二回戦、三回戦と順当に勝っていったが、準決勝で格下と思っていた学校に負けてしまった。「あの優勝候補の城南が負けてしまった。」と、体育館のざわめきはしばらく止まらなかった。相手校はまるで優勝でもしたかのような喜びようだった。

その日の帰り、部員たちは病院に寄った。五階の病室までのエレベーターの中でも、全員黙りこくっていた。恐る恐るドアをノックして入ると、先生は横になっていた。

「先生……、すみません。準決勝で負けました。」

キャプテンがそう言うと、辛そうにゆっくりと体を起こした坂先生は、

「そうか……。いや、一番大切な時にいてやれなかったな。すまない。三年生にもっと長くプレーさせてやりたかったのに。」

と、優しく声を掛けた。その言葉を聞いた三年生から嗚咽おえっがもれた。

「いいから、泣くな。」

と言いながら、坂先生の目にも涙が光っていた。

三年生が引退した後は、絵里がキャプテンになった。普通、三年生の引退は八月なのだが、今年はイン

ターハイに出ないので、六月下旬に新キャプテン選出ということになってしまったのだ。絵里にとって、次のキャプテンは自分かなという予感があったが、いざ指名されてみると急にその重圧を感じ、不安が募ってきた。

チームをまとめていけるんだろうか。チームに動揺が走っているこの時に。

キャプテンになった後、期末試験が迫っているのに、絵里はふと気付くと卓球部のことばかり考えていた。勉強もそこそこに、自分たちが「坂ノート」と呼んでいる部活動日誌から、昨年の新チーム発足時の練習メニューを探し、書き出してみた。それは驚くほど徹底的に基礎の見直しを図るためのメニューだった。絵里は改めて坂先生の思いを感じた。

試験が終わり、七月には一年生、二年生だけの練習が始まった。初めは緊張感もあった。しかし、「坂ノート」のメニュー通りにやっているのに、七月も末になると、一年生から不満が出始めた。

「キャプテン、ずっとこのメニューばかりなんですか。」

「基礎が大切なのは分かりますけど……。」

そう訴えてくる一年生の声に、絵里はそれを振り切るように、

「いいの。これが城南の練習なんだから。」

と強気で答えながらも、内心どうすれば良いのか分からなくなってきた。

そんな絵里を見て、由美がそばに寄ってきた。

「ねえ、絵里。このままでは行き詰まるよね。明日、二人で坂先生のお見舞いに行こうよ。練習がうまくいってないなんて言えないけど、先生の顔を見れば元気が出るかも。」

由美の言う通りかもしれないと絵里は思った。

翌日、練習の後、二人は病院に寄った。病室のドアを開けると、そこにはライバル校の監督、田原先生が

見舞いに来ていた。練習試合や合同合宿で、絵里も由美もよく知っている先生だ。先生たちは、高校時代から卓球選手としてのライバルだったと先輩に聞いたことがある。二人は新チームの様子を先生に報告したが、心配させてはいけなれないと思い、本当のことは言えなかった。関係のないことばかり話して時間がどんどん過ぎていった。

「あ、こんな時間。もう帰らないと。先生、お大事に……。」
そう言って帰ろうとする二人の顔を、坂先生がのぞき込んだ。

「二人とも、何か聞いてもらいたいことがあったんじゃないのか。」

絵里がドキドキしながら口ごもっている、横から田原先生がニヤツとして言った。

「坂先生を頼って来たんだらう。今、君たちは試されているんだよ。」

絵里は田原先生の言葉をどう受けとめてよいかわからず、坂先生の方を見た。先生もうなずいている。

「あの……先生……お大事にしてください。」

病室を出ようとした絵里と由美の後ろから、もう一度田原先生の声が飛んできた。

「君たち、試されているんだぞ。」

廊下に出た二人は、夕食を運ぶワゴンとすれ違った。絵里は、田原先生の「試されているんだぞ。」という言葉が頭から離れなかった。黙ったまま二人は病院の廊下を歩いた。玄関を出たところで絵里は突然立ち止まった。

「ねえ由美、明日から私たち、スイッチ切り替えよう！」

二人が振り返ると、病院の五階の窓が、夕日に赤く燃えていた。



ネット将棋

「うむむ、これは厳しいなあ。」

僕と敏和との将棋を横で見ている拓也がつぶやく。

〈分かつているよ。僕の負けだと言いたいのだろ。早く投了^{とうりょう}しろってことか。そんなことが簡単にできるか。〉

春休みが明けて、久しぶりの学校だ。金曜日の昼休み、多目的室での将棋タイムは楽しみの一つで、腕前は僕よりは下だと思っていた敏和と、一戦交えていた。簡単に勝てると思っていたのに、僕の知っている敏和ではない。四十手ほどの指し手で、圧倒的に僕は不利な状況に追い詰められてしまった。

〈敏和のやつ、いつの間にか強くなったんだ。こんな恥ずかしい負け方ができるものか。こうなれば、指し手を遅くして時間切れで逃げよう。〉

対局時計^{※2}を使つての対戦ではないので、一手一手に考え込んでいるふりをして、徹底的に時間稼ぎをした。見ている和夫たちは退屈したのか、別の組の観戦に回った。

やっと昼休み終了のチャイムが鳴った。僕はいかにも残念そうに言った。

「いいところなのに、時間切れだな。とりあえず引き分けということにしとくか。」

敏和は嫌そうな顔もせず、手早く駒を片付けるのが、かえって癪^{しゃく}にさわる。

教室への廊下を歩きながら、拓也が敏和に話し掛けた。

「敏和、どうした。ちよつとの間に強くなっているじゃないか。」

すると、敏和は笑いながら言った。



「実は、インターネット将棋を始めたんだ。そこで、定跡じやうせきの勉強をしたり、対局を申し込んで実戦したりして。まだまだだけど、少しは強くなったかも。時間があつたら、やってみて。いろんな道場があるから。」
〈敏和のやつ、そんなことをしていたのか。〉

聞き耳を立てていた僕は、さっそく試してみることにした。

帰宅して、飛びつくようにパソコンに向かった。幾つかのサイトに当たってみて、これならまあ勝てそう
だと思った中学生に対戦を申し込んだ。「持ち時間二十分、切れたら一手三十秒」の条件で応じてくれた。

ところが、勝てるどころか、あつという間に僕の陣形は壊滅的な状態になった。これが同じ中学生の実力
なのかと、情けなくなってきた。王将が詰むまでにはまだ手数はかかると思われたが、僕は完全に戦意を喪
失して、これ以上やっても無駄だ、と感じた。ボロボロになった盤面を見ているのも嫌になり、僕は黙って
コンピュータ画面を閉じた。

〈どうせ顔が見えるわけでもなし、本名を名乗っているわけでもなし、相手だって本当に中学生かどうか怪
しいものだ。みんなこんなものだろ。真面目にやっついていられるか。〉

しかし、そうは言っても何とか勝ちたくて、土曜日と日曜日はネット上の対戦をあちこち見物し、弱そう
な相手に見当をつけて勝負を申し込んだりした。そういう時は、勝つには勝つが面白くない。技量が上の相
手には、やはり勝つことができず、面白くない。どっちにしても、いきなりログアウトしてやる。

〈敏和はネット将棋で強くなったと言っていたけど、本当だろうか……。〉

週明けの月曜日、僕の隣の席で、明子の元気がない。落ち込んでいます、という沈んだ空気が身体中から
出ている。思わず声を掛けた。

「明子、どうした。相当へこんでいるな。」

すると、後ろの席から智子が言った。

「無理ないよ、昨日、ソフトボールの地区大会でヒロインになりそこねたもの。一点差で負けている七回裏、ツーアウトでランナー二・三塁、一打、逆転サヨナラの大チャンス。ここで打たなくてどうする。ところが、何とも情けない見逃しの三振、ゲームセット。これでへこまずにいられますかって。ヒロインじゃなくても、せめてデッドボールで塁に出たかったよ。最後のバッターにはなりたくないもん。『私のせいで負けました、ありがとうございます。』なんて絶対に嫌だから……。」

僕は内心、つぶやいた。

〈それは、そうだ。そんな気分が悪いこと、言えるか。〉

「なのに、監督は終わりの挨拶で、『明子は二重にいい体験をしたな。ラストバッターの経験に加え、悔しき紛れに、心を忘れた挨拶しかできなかった自分というものを知ったことだ。目の前の相手にお礼を言うことすらできないようでは、決して強くはなれないぞ。』だって。訳が分からないね。」

間髪入れずに、

「私、今なら分かる気がする……。」

と、明子が言った。

そこへ、敏和も話に入ってきた。

「僕の好きな将棋では、誰もがいつも最後のバッターだよ。誰も代わってくれないし、それに『負けました。』って、自分で言わないと対局が終わらない。」

智子が驚いたように言う。

「それって、きついでしょ。」

「きつかったよ。特にネット将棋なんか、見えない相手に『お願いします。』で始まって、勝負がついたと思ったところで、自ら『負けました。』って言う。そして、終わりには『ありがとうございます。』と挨拶するんだけど、こういうのは、最初、実感がなかったなあ。でも、目には見えない相手とどう向き合うかで、自分が試されてる気がしてきて、きちんと挨拶できるようになったよ。」

静かに聞き入っている明子をよそに、智子は更に尋ねた。

「だからといって、強くなる訳じゃあないでしょ。」

「強くなるために、『負けました。』って言うのじゃないと思う。心から『負けました。』って言うことで、対局後の感想戦で検討される好手こうしゅや悪手あくしゅがスーッと頭に入ってきて、心にすみつく。それで、力が伸びていくのだと思う。初めての人も仲良くなれるしね。だから、最後は『ありがとうございます。』って、本気で言えるんだ。」

智子は、敏和と明子を交互に見ている。自分に言い聞かせるように、明子が言った。

「まあ私も、試合の前と後で、『お願いします。』『ありがとうございます。』は言っているけど、そこまで考えたことはなかったなあ。敏和くんって大人なんだ……。そうか、『負けました。』と言える試合をすればいいんだ。」

「ほおー。明子、深いこと言うなあ。それとも、負けた言い訳かい。」

敏和のツツコミに明子と智子は笑ったが、僕は笑えなかった。

※注1 投了：不利な方が負けを認め、指さずにただちに勝負が終わること。

※注2 対局時計：対戦を行う際に競技者の持ち時間や制限時間などを表示して時間管理を行うための時計。

※注3 定跡：昔から研究されてきて最善とされる、決まった指し方。

違うんだよ、健司

夏休み明け、一人の転校生がやってきた。日焼けした精悍せいかんな感じである。名前は米村健司。

健司は、僕と耕平の所属している野球部へ入ってきた。三人とも家が近いこともあって、登下校が一緒に
なり、共に過ごす時間が長くなっていった。

付き合ってみると、健司は何事も積極的で、はっきりとものを言う。ある日の掃除の時、耕平がほうきをバットにして振っていたら、さっそく、健司が、

「早くしようや。」

と、注意する。耕平が大げさに肩をすくめたので、僕もまねて肩をすくめた。健司は、鋭い目つきで、ちらっと僕の方を見た。

ある日、三人でショッピングセンターに出掛けた時のこと。自転車置き場が
いっぱいだったが、耕平は、無理に押し込んだ。僕がどうしようかと迷っていると、耕平が、

「その辺に突っ込んでおけばいいんだよ。」

と、僕をせかしてさっさと行ってしまった。慌てて自転車を突っ込もうとすると、健司が言ってきた。

「おまえ、いつも耕平に合わせているけど、それでいいのか。」

「別に。それが普通じゃないか。」

「そうかなあ。そんなのが友達と言えるか。」

「おまえ、堅いんだよ。お互いに適当に合わせた付き合いが最高なんだよ。」



そうやって僕は、耕平の後を追った。

こんな調子で一年近くたった二年生の七月のことだった。ある日、健司が話し掛けてきた。

「おい、この頃耕平、変じゃないか。」

「そうだなあ。部活も休むし、授業中もよく居眠りをしているな。」

「何かあったのかな。」

と、健司は心配そうに言った。

「気になるんだったら、おまえが聞けばいいじゃないか。」

「聞いてみたよ。だけど、あいつ何にも言わないんだ。おまえ、幼なじみだろ。聞いてみてくれよ。」

僕も最近の耕平は少し変だと思っていたので、それとなく聞いてみた。

耕平は、一瞬、驚いたような顔をした。しかし、

「いや、ちょっとな。」

と言ったきりで、何も詳しいことは言おうとしない。もうそれ以上何も聞いてはいけけないのだと、その時の僕は思っていた。

何も聞けないまま、夏休みに入ってしまった。そんな折、健司から思いがけない提案があった。

「おい。耕平を誘ってG町に行かないか。盆踊りがすごいんだぜ。」

「分かった。いいよ。」

翌日、健司と二人で耕平の家に向かった。

「いや、僕は……、無理だ。二人だけで行ってくれ。」

「なあ、そう言わずに一緒に行こうよ。」

と、押し問答をしていると、耕平のお母さんが、

「耕平、せっかく誘ってくれているんだから、一緒に行ってきたら。」

「でも、お母さんが……。」

「いいの、いいの。行ってきなさい。」

G町に着いた三人は、健司のばあちゃんに大歓迎された。夕方、町に出ると大勢の人が踊っている。最初は見ただけだったが、僕たちも盆踊りの輪の中に入り、結構夢中になった。

踊り疲れて帰ってくると、家の中からにぎやかな声がする。何ごとだろうかと思いつながら戸を開けると、二人の見知らぬおばあさんが台所に立っている。僕たちの驚いた様子を見たばあちゃんは、

「いやあ。お節介なばあさんたちなんだよ。」
と言う。

「何言ってるんだ。あんたの孫と友達に、鮎あゆを食べさせようと思って持って来たんだ。これは親切というもんだよ。」

と、三人のばあちゃんたちはいかにも楽しそうに言い合っている。

その夜、僕たちは、三人のばあちゃんと晩ご飯を一緒に食べた。おばあさんの一人は、健司のばあちゃんと幼なじみで、もう一人のおばあさんは結婚してG町に来たのだそうだ。そのおばあさんが、

「今ではみんな家族みたいなもんじゃ。隠し事の一つもできん。」

と、言って嬉うれしそうに笑っている。

食事の後、僕たちは庭に出た。星がきれいだった。川のせせらぎも聞こえる。頬に当たる風が心地よい。僕たち三人は妙に無口になった。今日の三人のばあちゃんたちを思い浮かべていると、「そんなの友達と言えるか。」という健司の言葉が、僕の中によみがえってきた。ふと耕平を見ると、沈んだ様子でうつむいている。

「耕平、どうしたんだ。」

と、僕が聞くと、耕平がボソツとつぶやいた。

「ばあちゃんたち、元気でいいなあ。」

「えっ。」

「実は、おばあちゃんが……。」

と、ぼつりぼつりと話し始めた。

「この頃変なんだ。……もの忘れがひどくなって、何度も同じことを言うようになったと思っていたら、この頃は家を出て行って帰って来れなくなるんだ。昼でも夜でもお構いなしでね。だから何か物音がすると、どこかに行ったんではないかと一晩中気が気でなくて……。」

「そうか、そうだったのか。」

「でも時々はいつもの普通のおばあちゃんなんだ。この間……僕の顔をよく見せておくれって……。憶えておきたいって……。言うんだよ。」

耕平の声は途切れた。黙って聞いていた健司が、

「耕平。ごめん。話しくいことだったのに、この間から言え、言えって。ごめん。俺はお節介だったんだ。」

「違うんだよ、健司。お節介なんかじゃないよ。なあ、そう思うだろう。」

と、耕平が僕の方を見た。

「そうだよ、お節介じゃないよ。健司が大事なことを教えてくれたと、僕は思っている。」

「俺、転校が多くて、早く友達になりたくて、ついお節介するんだよ。俺も友達ができて嬉しいよ。」

「耕平、僕に何かできることがあったら言ってくれよ。」

空を見上げると、真上に夏の大三角が明るく輝いていた。

嵐の後に

「ところでよ。お前んとこの明夫のことだけど、いったい今何してんだい。見たところ仕事もしてないみたいだけど、心配でなあ。」

「ああ、困ったもんよ。わしも女房もあいつのことには、頭を悩ましているよ。まったく何を考えてるのか……清さんとこの勇太は、日に日にたくましくなっていくっていうのによ。」

「まあまあ、そう言うなって。なあ、明夫を俺の船に乗せてみんか。勇太とは、同級生だしよ。あいつも助かるだろうから。俺らの若い頃みたいによ。」

「そうは言ったって、清さんに迷惑掛けるのが目に見えとるしな。」

「何、水臭いこと言ってるんだ、ガキの頃からの俺と信さんの仲じゃないかよ。」

親父たちのそばで漁具の手入れをしながら、黙って聞いていた俺は、親父のお節介がまた始まったと思いつつも、内心嬉しかつた。

同じ水産高校で学んだ親父たちは、卒業と同時に同じ遠洋漁船に乗っていた。若かった頃の二人は、何ヶ月も家に戻れない厳しい漁場で互いに励まし支え合い、同じ釜の飯を食って一人前になったと聞いている。これまでの人生は、互いの存在なくしては語れないほどの仲だ。家庭を築いたのも息子を授かったのも、偶然、同じ年だった。それが、俺と明夫だ。

俺たちが高校生になった数年前、漁業の景気が悪化し始めたのをきっかけに、親父たちは遠洋漁船を下りた。それまでに貯めた金を頭金にして、親父は、小型船を手に入れ、今は、せがれの俺と近海で操業している。明夫の親父の信さんは、漁師料理を売りにした居酒屋を営み、店で使う鮮魚の仕入れに、毎朝、こうし

て魚市場に顔を出す。親父たちは、今だにどんな些細なことも毎日のように語り合い相談し合っている。

明夫と俺は、親父たちと同じ水産高校の同級生だった。俺たちも子どもの頃からいつも一緒にいたし、何でも話し合える仲だった。だが、確か開店した居酒屋が忙しくなってきた頃からだったように記憶している。あの頃、時々遊びに行くと、明夫はいつも一人で飯を食っていた。そして、いつの頃からか、明夫は、俺を避けるようになり、派手な仲間と付き合うようになっていた。いつも大勢に囲まれ楽しそうにしている明夫が羨ましかった。置いてきぼりにされたような気分になっていた。明夫と時々顔を合わせながらも、とりとめのない話をするばかりで、それをとがめることもできないまま、今まで来てしまっていた。

その夜、夕飯を済ませた俺は、親父の了解を得てから不安を抱えながらも明夫に会いに行った。

明夫は、突然の俺の訪問に驚いた様子だったが、以前のように自分の部屋に入れてくれた。ひとしきり同級生の話題で盛り上がった後、俺は、意を決して投げかけた。

「なあ、明夫、これから何か仕事の当てでもあるのか。」

「別に……。」

明夫の表情がこわばれるのが見て取れた。俺は、なるべく明るい声で言った。

「だったらよ、うちの親父が、船に乗らんかってよ。実は、俺一人じゃきつくてよ。明夫が、手伝ってくれと親父も俺も助かるんだ。」

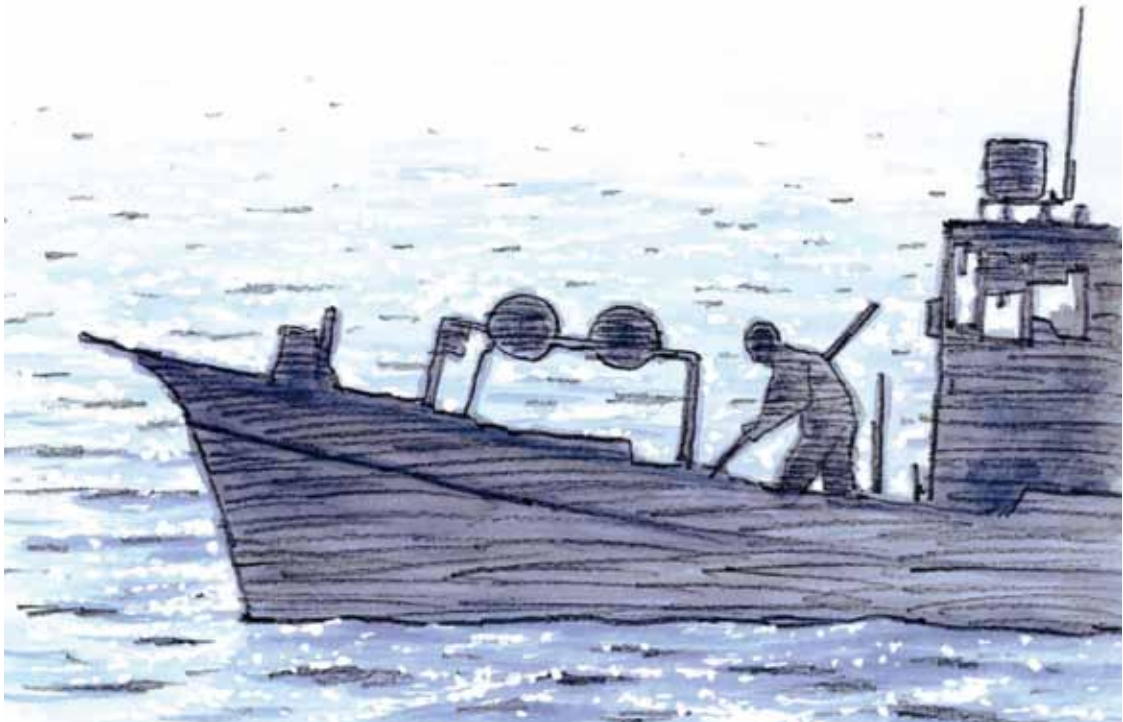
「ああ……考えとく。」

明夫は、ぶつきらぼうな声で答えた。

水産高校を卒業したものの明夫は、就職する先が決まらず悩んでいた。だからといって親父の仕事を継ぐという選択肢は、持ち合わせてはいなかった。同級生が仕事を決めていく中、焦りながらも、しばらくは市内のコンビニやレストランで働いていた。だが、接客という仕事が性に合わないのか、あろうことか客や店

主とけんかになって、どこも長くは続かなかった。深夜まで遊んだり、おふくろさんに金をせびったり、安定しないふらふらした生活を続けていたのだった。

俺が訪ねて数日してから、明夫が漁師見習いになることを決意したことを親父から聞いた。早速、その夜から三人での出漁が始まった。しかし、期待していた通りとうまくはいかなかった。明夫が、少しでも怠けると即座に親父の罵声ばが飛んだ。怒鳴られる度に、明夫は、船べりのあちこちに拳を打ち付け、海に飛び込んでやるなど無謀な怒りを声にした。黙々と慣れた手つきで仕事をしている俺をいまいまましそうな表情で見ている明夫と目が合うこともあった。明夫の働きぶりは、総じて感心できるものではなかった。親父の姿が見えないところでは特にひどかった。俺は、最初は慣れないせいもあるからと思っていたが、操業用の道具の荒っぽい扱いや、雑な甲板掃除かんばんで汚れを残したままでも平気にいる明夫の態度が気になってきていた。明らかに俺の前では、やる気の無さを見せつけていた。俺はそれを分かっているながらも、面と向かうと何も言えなくなってしまう、仕方なくその後始末を請け負っていた。



ある日、そんな二人のぎくしゃくした関係に気付いていた親父が、俺に向かって言った。

「勇太、お前、明夫のことを本当に思っているなら、遠慮せずに思ったことを言ってみてやれ。仕事も一から丁寧に教えてやれ。上っ面だけで付き合ってるんじゃないぞ。明夫がこの先どうなってもいいのか。お前からそれでもガキの頃からの付き合いなのか。」

親父は、俺の心の内を見抜いていた。親父の言葉が、胸に刺さった。ずっしりと重い固まりを胸に抱えたまま、出漁の時間が迫ってきていた。弓なりの月がぼんやりと辺りを照らしている穏やかな晩だった。明け方から北西の風が強まるという予報が出ていたものの漁場がそう遠くないこともあって、経験豊富な親父の決断に従った。

出港してから二時間足らずで、水深百メートルほどの漁場に着いた。海風が頬を突き刺す。ずっしりと重い網を引き上げる指先が、悲鳴をあげていた。ブリッジにぶつかる波が飛沫を上げ、時折、突風が駆け抜け始めた。夜明けともいえず立ちこめた真っ黒な雲の固まりから、突然、激しく雨が降り出した。やがて波のうねりは、ブリッジを越える高さにまで達し、船体は縦横無尽に揺れた。波が高いと、胃の縁が引つ張られ血液が逆流するような気分になる。明夫にとっては、初めての時化だ。暴風に逆らいながら網を引き上げようとしているが、体が思うように動かないようだ。明夫のおぼつかない足さばきは、今にも大きな波のうねりの中に引きずり込まれそうだった。俺は、危険の大きさと一瞬の恐怖に戦慄が走った。俺は、思わず明夫の腕を掴んだ。

「明夫、何しとるつ。全身に力を入れろつ。」

俺の渾身の叫び声が、激しい雨音と共に明夫を我に返らせたようだった。

「ぐずぐずするなつ、波に飲み込まれるぞ。後は俺がやる、ブリッジに入れつ。」

明夫は、声を荒げる俺の指示に従った。網の引き上げを終えた俺は、ずぶ濡れになって中に入った。明夫

は、暴風雨のさなか、狭いブリッジの壁に身体のあちこちをぶつけながら何度も吐いていた。俺は、その度に、明夫の背中をさすった。

「す、すまん。かつこ悪いな、俺。」

「何、謝ってるんだ。波に飲み込まれなくてほんと良かった。初めての嵐の時は、誰でもこうなんよ。俺なんか、もっと悲惨よ。」

「勇太、お前が羨ましかつたんよ。俺らは、ずっと一緒やったやろ……。」

俺にとっては、意外な言葉だった。俺は、これまで明夫の心境を考えてみようとしなかった。明夫の表面だけを見て、それ以外の何も見ようとはしてこなかった自分が悔やまれた。今、まっすぐに明夫と向き合わなければならぬ。そう思うと、俺は、驚くくらいに素直な気持ちになれた。

「明夫、今までどこで何やとつたんよ。待とつたんぞ。」

「分かつたよ……、だから、戻ってきた、ここに。」

蒼白な顔の明夫が苦笑いをしながら言った。

やがて、風雨は弱まり船の揺れは次第に小さくなっていった。操舵室そうだから親父の野太い声が上がった。

「おー、引き上げるぞ。エンジン全開。明夫、大丈夫か。みんなお前とおんなじだ。俺もお前の親父もな。お前らも、いっちよ前になる通り道を通らんな。」

そう言うと、親父は、大声で笑った。俺たちは顔を見合わせて、がっちりと手を握り合った。

西の空の棚雲の切れ間のあちらこちらから、光が波間に降りてきていた。



言葉の向い方に

夜中に、はっと目が覚めた。すぐにベッドから起き出してリビングへ降り、パソコンの電源をつける。画面の光が部屋の片隅にまぶしく広がった。

私は、ヨーロッパのあるサッカーチームのファン。特にエースストライカーのA選手が大好き。ちようど今頃、向こうでやっている決勝の試合が終わったはず。ドキドキしながら試合結果が分かるサイトをクリックした。やった、勝った。A選手、ゴール決めてる。

思わず声が出てしまった。大声出したら家族が起きちゃう。そつと一人でガッツポーズ。

みんなもう知ってるかな。いつものように日本のファンサイトにアクセスした。画面には、「おめでとう」の文字があふれてる。みんな喜んでる。嬉しくて胸がいっぱいになった。私もすぐに「おめでとう」と書き込んで続けた。

〈A選手やったね。ずっと不調で心配だったよ。シュートシーンが見たい。〉
すると、すぐに誰かが返事をくれた。

〈それなら、観客席で撮影してくれた人のが見られるよ。ほら、ここに。〉

〈Aのインタビューが来てる。翻訳も付けてくれる。感動するよ。〉

画面が言葉で埋め尽くされていく。私は夢中で教えてくれたサイトを次々に見に行った。

学校でもサッカーの話をするけど、ヨーロッパサッカーのファンは男子が多



い。私がA選手をかつこいいいよね、って言っても女子同士ではあんまり盛り上がりがない。寂しかったけど、今は違う。ネットにアクセスすれば、ファン仲間がいっぱい。もちろん顔も知らない人たちだけど。今この瞬間、遠くの誰かが私と同じ感動を味わってる。なんか不思議、そして嬉しい。気が付くともうすぐ朝。続きはまた今夜にしよう。

今日は部活の後のミーティングが長かった。家へ帰ると、食事を用意して待っていた母に、「ちよつと待ってて。」

と言って、パソコンに向かった。優勝後のインタビューとか、もつと詳しく読めるかな。楽しみ。

〈Aは最低の選手。あのゴール前はファールだよ、ずるいやつ。〉

開いた画面から飛び込んできた言葉に、胸がどきつとした。なに、これ。

〈人気があるから優遇されてるんだろ。たいして才能ないのにスター気取りだからな。〉

ひどい言葉が続いてる。読み進むうちに顔がほてってくるのが分かった。

怒りでいっぱいになって夢中でキーボードに向かった。ファンサイトに悪口を書くなんて。

〈負け惜しみなんて最低。悔しかったら、そっちもゴール決めたら。〉

すると、また次々に反応があった。

〈向こうの新聞にも、Aのプレイが荒いって、批判が出てる。お前、英語読めないだろ。〉

〈Aのファンなんて、サッカー知らないやつばかり。ゴールシーンしか見てないんだな。〉

〈Aは、わがまま振りがチームメイトからも嫌われてるんだよ。〉

必死で反論する私の言葉も、段々エスカレートしていく。でも絶対負けられない。

「加奈子、いい加減にしなさい。食事はどうするの。」

母の怒った声。はっと気付いて時計を見た。もう一時間も経^たってる。

「加奈ちゃん、パソコンは時間を決めてやる約束よ。」

ずっと待たされていた母は不機嫌そうだ。

「ごめんごめん。ちよっと調べてたらつい長くなっちゃって。」

「そうなの。なんだか怖い顔してたわよ。加奈ちゃん、こっちに顔を向けて話さない。」

「はあい、分かりました。ちゃんと時間守ります。お母さんのご飯おいしいよね。」

そう言いながらも、私の頭はA選手へのあのひどいコメントのことでいっぱいだっただ。

「まったく調子いいんだから。でもね、ほんとかどうか目を見れば分かるのよ。」

私は思わず顔を上げて母を見つめた。その表情がおかしかったのか、母がぶっと吹き出した。つられて私も笑った。急にお腹がすいてきちゃった。

食事の後、サイトがどうなっているか気になって、恐る恐るパソコンを開いてみた。

〈ここにA選手の悪口を書く人もマナー違反だけど、いちいち反応して、ひどい言葉を向けてる人、ファンとして恥ずかしいです。中傷を無視できない人はここに来ないで。〉

ええーっ。なんで私が非難されるの。A選手を必死でかばってるのに。

〈A選手の悪口を書かれて黙っているって言うんですか。こんなこと書かれたら、見た人がA選手のことを誤解してしまうよ。〉

〈あなたのひどい言葉も見られています。読んだ人は、A選手のファンはそういう感情的な人たちだって思っちゃいますよ。中傷する人たちと同じレベルで争わないで。〉

なんで私が責められるのか全然分からない。キーボードを打つ手が震えた。

〈だって悪いのは悪口書いてくる人でしょ。ほっとけって言うんですか。〉

〈挑発に乗っちゃだめ。一緒に中傷し合ったらきりがないよ。〉

優勝を喜び合った仲間なのに。遠くのみんなとつながってるって、今朝はあんなに実感できたのに。なんだか突然真つ暗な世界に一人突き落とされたみたいだ。

もう見たくない。これで最後。と、もう一度画面を更新した。

〈まあみんな、そんなきつい言い方するなよ。ネットのコミュニケーションって難しいよな。自分もどうしたらいいかなって、悩むことよくある。失敗したなーって時も。〉

〈匿名だからこそ、あなたが書いた言葉の向こうにいる人々の顔を思い浮かべてみて。〉

えっ、顔。思わず私はもう一度読み直した。そして画面から目を離すと椅子の背にもたれて考えた。

そうだ……。だめだなあ。何で字面^{じづら}だけにとらわれていたんだらう。一番大事なことを忘れていた。コミュニケーションしているつもりだったけど。

私は立ち上がり、リビングの窓を大きく開け、思いっきり外の空気を吸った。

「加奈ちゃん。調べ物はもう終わったの。」

台所から母の声がする。

「調べ物じゃないの。すごいこと発見しちゃった。」

私は、明るい声で母に言った。

背番号10

ジリジリと太陽が照りつけるグラウンドは白く乾ききっている。ノックのボールが右へ左へと容赦なく飛んでくるたびに砂煙があがる。飛びついて捕球したボールを握ろうとしたが、汗で手が滑った。一瞬本塁への送球が遅れた。監督の厳しい声がとんでくる。

「しっかり掴ま^{つか}んかあ。」

僕は、甲子園に出たくてこのS高校を選んだ。両親は、家から近い高校を強く勧めたが、それを押し切って入学した。

それから一年余りが経^たち、夏の県大会で惜敗した先輩が引退した後、僕はキャプテンとして新チームを引っ張る立場になった。チームの目標は「甲子園出場」。これは決して夢ではない。過去には何度か甲子園に出場しているS高校であり、地元は野球好きの人が多く土地柄として有名で、期待も大きい。

「よし もう一本。」

大声で監督に答えた僕の目の前に、強烈なスピードでノックのボールが迫る。その瞬間に目の中に汗がしみこんだ。ボールがぼやけて大きくなったが、必死に地面を蹴ってボールを体ごと受け止める。投げたボールがキャッチャーミットにバシッとおさまった。

「よし、終わり。」

大きな声に、ほっとしたのもつかの間。連係プレー、走塁練習、打撃練習と息をつく間もなく練習は続く。用意したお茶はすぐになくなり、顔や腕は塩を吹く。

こうして、夏の苦しい練習をこなしきり、新チームの力を試す秋の新人戦を迎えた。僕は、チームはかなりの力をつけたと思っていた。しかし、一回戦、二回戦と勝ち抜いた後、準々決勝に臨んだが、強豪のY高校に逆転負けしてしまった。この敗退は春の甲子園出場が絶望的であるということの意味する。

翌日の練習は、暗いムードが漂っていた。

「あんなに苦しい練習をやり抜いてきたのに……。」

「やっぱり俺らには、甲子園は無理ってことだ。」

と言いつつも出てきた。

走塁練習や守備練習の動きは、新人戦前と明らかに違っていた。それでも監督は三日間黙ってその様子を見ていたが、四日目の練習の後のことだった。監督は全員を集め、みんなを見回してただ一言、

「お前たち、それでいいのか。」

と言った。みんなは黙って下を向いた。僕はキャプテンとして身が縮まるような思いがした。

僕は、それから、後始末やグラウンド整備の不備に対して、あるいは動きの緩慢かんまんさや小さなミスに、だれかれなく大声を出してとがめた。しかし、一向にみんなの気持ちは高まらず、僕の気持ちは我慢の限界に達していた。

「こんなんじゃない甲子園なんかとても無理。キャプテンなんかやってられんわ。」

思わず父の前で不満を口にした。父は黙って聞いていた。

それでも、冬場の練習を何とか続けていた。

「集合が遅いじゃないか。」

「もつと真剣にやれよ。」

自分のイライラをぶつけるかのように注意する僕を、次第に同級生や下級生は冷ややかな目で見るようになった。時には避けるような行動をとる者さえもある。どうすればいいのか分からなくなっていく自分がいた。

そんな二月の寒い日。遠投練習をしていたその時、

「あつ。」

突然、右肘ひじに鋭い痛みが走った。腕がダランとなって力が入らない。思わず肘を押さえてうずくまった。曲げようとするとまた痛みが襲ってくる。監督は僕の様子を一目見て、

「すぐに病院へ行こう。」
と促した。

医者と言葉は無残だった。

「右肘ひじが剥離骨折はくりこししている。完全に治るまでには半年くらいはかかる。それまでボールを投げてはいかんどぞ。」

僕は目の前が真っ暗になった。

「そんな……。」

思わず口走る僕を、医者はじろつと見た。確かに肘を曲げることもできないのだから、ボールを投げるところではない。これでは顔も洗えない。

電車に乗ったこともはつきりとは覚えていない。気が付いたら駅に着いていた。家への道をたどりながらさまざまなのが脳裏のうりに断片的に浮かんで消えた。

固定された僕の腕を見て、父は驚いたようだが、僕の説明を黙って聞いた。

「父さん、僕、野球をやめて勉強に専念しようか。」

ボソッと、つぶやいたとたん、

「お前の野球に対する思いは、そんなもんだったのか。」

と、一喝された。思わず父の顔を見ると、顔が真っ赤になっていた。こんな父を見たことがなかった。父は高校進学の時、野球より勉強をと近くの学校を勧めたはずなのに、どうしてだろうか。その晩、いろいろなことを考えていると布団に入ってもなかなか寝付けなかった。

次の日、僕は授業が終わるのを待ちかねて急いで部室に行った。いつものように着替えてグラウンドに出て、グラウンド整備、バットやボールの準備など、自分のできることをした。これまであんなに避けていた部員が心配そうに見ているのが目に入った。

毎日練習に出てもバットを振ることもボールを投げることもできない。ひたすら、チームメイトたちに言葉を掛け続けた。側そばで見ていると、グラウンドでプレーしている時には見えないことがよく見える。ポケットに入れたメモ帳にさつと書きとめ、時間を見つけては、彼らに伝えた。よいプレーの時は、

「ナイスバッティング。」

「いいぞ。」

と、大きな声で励ました。そのうち、

「キャプテン、ちよっと聞いて欲しいことがあります。」

「居残り練習に付き合ってくれよ。」

と、僕に言うようになってきた。

北国の遅い春が訪れた頃には、チームにすっかり明るさと元気が戻ってきて、どんどん結束も固くなつた。練習の最後に、僕が声を掛けて、

「甲子園、行くぞ。」

と円陣を組むのが習慣になってきた。

夏の甲子園大会の県予選が近づいてきたある日、練習が少し早めに切り上げられ、集合の合図があった。

「ベンチ入りのメンバーを発表する。」

監督の言葉に、みんな緊張の面持ちだ。

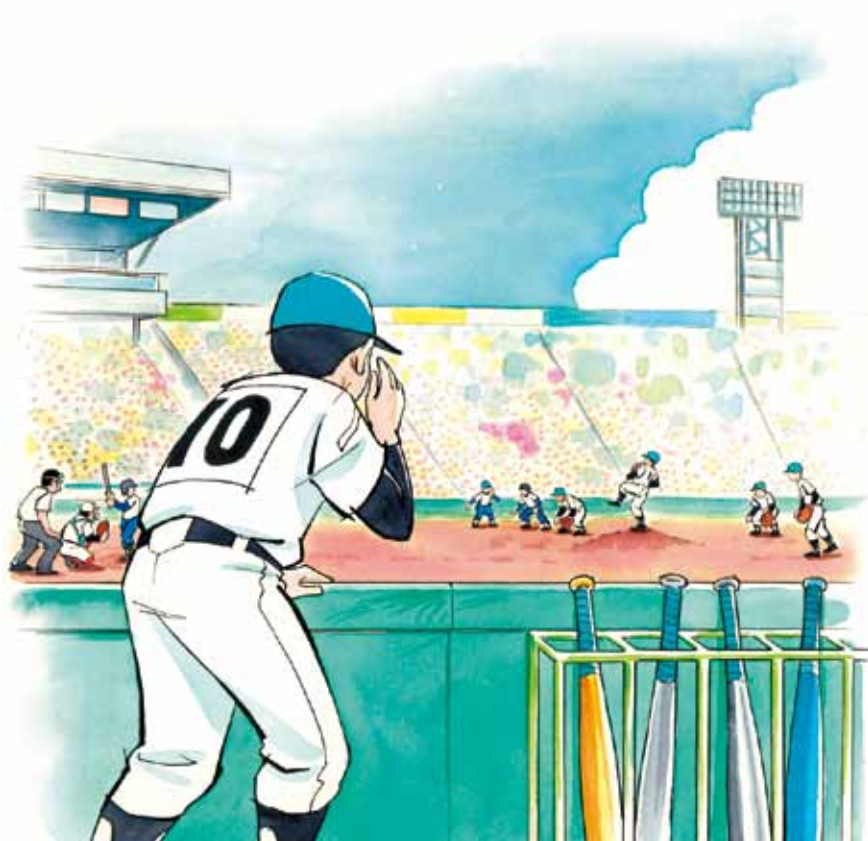
「たちばな橋。」

真っ先に名前を呼ばれた僕は、えっと耳を疑った。故障者の僕が選ばれるはずはない。

一番前に座っている僕を監督はまっすぐに見ている。

「背番号10だ。お前はキャプテンとしてずっとよくチームを見てくれた。大会でも頼むぞ。」

その時チームメイトから拍手が起こった。拍手に促されて立ち上がり、監督の差し出すゼッケンを両手で受け取った僕は、監督に一礼した。すると、もう一度さらに大きな拍手が起



こった。総勢八十人の拍手がぐつと胸に迫ってくる。僕は深々と頭を下げた。

この年、S高校は、十一年ぶりに県の頂点に立ち、甲子園出場を決めた。背番号10はベンチにいるキャプテンだった。

帰郷

私は故郷のK町に向かった。一人暮らしの母が脳卒中で倒れ、町の病院に運ばれたと連絡が入ったからだ。F駅で新幹線を降り、小雪のちらつく在来線ホームでなかなか来ない電車を待っていた。家路を急ぐ人たちの中で、自分のまわりだけ空気が止まっているように感じた。

やっとホームに入ってきた電車に乗り込むと、一番隅の座席に身を沈めた。

動き始めた電車の揺れを体を感じながら、目を閉じていると、朝からのことが思い出された。撮影現場に出掛けようとした時、電話が入った。詳しいことは分からなかったが、とりあえず監督にだけ事情を話して急いで東京を出てきた。

私はK町で生まれた。父は、私が幼い頃に亡くなり、母は女手一つで私を育てた。高校を卒業すると、俳優を目指して一人上京した。幸い劇団の研修生になることができた。演技の練習の合間には、食べるために夜昼となくアルバイトをして金を稼いだ。ようやく端役ではあるが、仕事をもらえるようになり、少しずつ映画やテレビにも出演するようになった頃には、三十も半ばを過ぎていた。今では、一人暮らしなら何とか食べられるようになっていた。

そういえば、母のところへ帰ったのはいつだっただろう。母の声を聞いたのはいつだったのか。思い出せない。母は、いくつになっただろう……。

「……七十歳になるのか。」

窓の外は暗い。小さな明かりだけがちらちらと点滅して去って行く。

「命に別状はないだろうか。」

私はコートのポケットに入れた手を強く握り締めた。

ふと気が付くと、車両には数人しか乗っていない。

K 駅の階段を駆け下り、雪が一段と激しく舞う中を、タクシー乗り場に急いだ。開いたドアに身を滑り込ませると、ドアがまだ締まり切らないうちに、

「町立病院に急いで下さい。」

と、告げた。

私のただならぬ様子を察したのか、運転手は返事をしてちらっと私を見た。

病院に近づくと、運転手は、

「正面は閉まっていますから、夜間入口に回しましょう。」

と言う。礼を言ってタクシーから降りると、受付で、名前を告げて病室を聞いた。エレベーターを降りた私は、病室の前で少しためらって、ドアに手をかけた。

私の目に飛び込んできたのは、ベッドに横たわる母の姿だった。ベッドの向こうに座っていた老夫婦が同時に立ち上がった。

「母は……、どうですか。」

「大丈夫。命に別状はないそうよ。」

ひそやかな声でおばさんは答えた。

「今はもう、落ち着いて眠っている。」

おじさんは、私の顔を見つめて言った。

私は大きく息を吐いた。

「ありがとうございます。」

私はただ、頭を下げ続けた。

「研ちゃん、かばんを置いて、お座りよ。疲れただろう。」

おばさんは、そう言って、自分の座っていた椅子を持ってきた。

「おじさん、おばさん。何から何までお世話になって本当にありがとうございました。お二人こそお疲れでしょう。今夜は僕がいますから、もう、お家で休んでください。」

老夫婦をエレベーターまで見送り、病室に戻ろうとして、廊下の明かりが落としてあるのに気が付いた。腕時計を見ると十時を回っている。

病室に戻って改めて母の顔を見る。母の顔に苦痛はなく、寝息は穏やかだ。

翌朝、夜のうちに降った雪が一面に白い世界をつくり、朝日に

きらきらと輝いていた。

私がまどろみから目を覚ますと、母が見つめていた。

「研一。心配かけたね。」

気丈な母の声とは思えぬ弱々しい声だった。

「何言ってるんだ。」

私が、立ち上がるうとした時、老夫婦が入ってきた。

「研ちゃん、朝ごはん、まだだろう。」

と、言って岡持ちから皿を出した。

「朝ごはんらしくないけど、チャーハンだよ。子どもの頃好き



だったよね。」

老夫婦は、私たち親子が住み込みで働かせてもらっていた中華料理店を経営していた。

おじさんは自分たちのまかないを作る時は、私の食事も必ず作ってくれた。おじさんに、

「研ちゃん、今日のまかない何にしようか。」

と尋ねられると、いつも、

「チャーハン。」

と、答えたものだった。

老夫婦はすでに店をたたんで年金生活を送っている。母がその店を借りて小さな居酒屋を開いた時も何かと力になってくれたと母は手紙で知らせてきた。その老夫婦が、私の好きであったチャーハンを朝から作って持ってきてくれた。私は、おじさんが差し出したチャーハンの皿を押し頂いきたくように受け取った。私の胸に熱いものが流れるのを感じた。

「研一。昨日の晩、寝てないんだろう。家に帰って眠っておいで。」

母に促された。眠る気はなかったが、身の回りのものを少し持ってこようと、老夫婦と一緒にかつて親子で住んだところに向かった。

「研ちゃん。佐知子さんのことだけど、軽い後遺症が残るかもしれないとお医者さんが言っていたけど。」

「そうですか。リハビリが必要になるんですね。」

店には、おじさんの字で、

〈都合によりしばらくの間休業します〉

という張り紙がしてあった。母の店は、母の美味しい手料理と優しい人柄で町の人が集まっていたらしい。

母の部屋で入院生活に必要なものをまとめてみると、引き出しの中に小さな包みがあった。私名義の通帳

だった。見ると私が母に送金したものがそのまま貯金されていた。また、私の芸能活動のスクラップ帳も出てきた。何度も何度もページをめくったのだろう。端がすっかりめくれてしまっている。しかし、先ほど通ってきた一階の店の方には、私の写真は、一枚もなかったように思う。

病院に戻ると、さっそく見舞い客があった。町の人で店の常連さんたちだという。私が入っていくと、

「えっ、研一さんって。俳優の……。」

「おばさん、何にも言わないだよ。なんでだよ。」

母は黙っている。それで私には、店に写真が一切ないことの原因が分かった。母は、きっと私の俳優としてのイメージを壊さないようにと思ったのだろう。私はそんな母のことを気に掛けもせず、遠く離れた都会で一人でのうのうと暮らしてきた。

見舞い客の帰った後、私は母に言った。

「母さん、東京で一緒に暮らそう。」

母は、首を振った。

「だって、しばらくリハビリも必要なんだろう。もう遠慮しないでいいんだよ。」

「この町がいいんだよ。」

母が、ぼつりと言った。

その言葉を聞いた老夫婦は顔を見合わせた。

「研ちゃん。私たちはまだ元気だから、私たちが良ければ、佐知子さんのリハビリや身の回りのことは手伝うけど……。」

おばさんは、遠慮がちに申し出た。

私は驚いた。確かに長年世話にはなっただけけれど、病気になった母をお願いしますとは言えるはずがなかつ

た。

「研ちゃん、私らだけじゃないんだよ。さつき見舞いに来た連中だって、ちよくちよくのぞくって、言ってるんだよ。」

嫌がる母を東京に連れ帰ることは難しい。しかし、母のことは私が面倒を見なくてはいけないと思っている。母は、この町でどんな人たちとつながっているのだろう。大人になってこの町で暮らしていない私には分からない。甘えさせてもらってもいいのだろうか。

頭を上げると二人が私をじっと見つめている。その目は優しかった。

「ありがとうございます。母とゆっくり話し合ってみます。」

私は、ただこの言葉しかなかった。

ドラマの撮影のため、とりあえず一度東京に戻らなくてはならず、翌日私は駅に向かった。

「研一。」

と声を掛けられて振り向くと、中学校の同級生の雅也であった。

「お母さん、悪いんだってな。大丈夫か。」

思いがけないことだった。雅也とは、特別仲が良かったわけではない。それでも病状を尋ねてくれる。そんなぬくもりがこの町にあったのか。

来た道を引き返す電車に乗った。私は優しさに包まれていた。

窓から見える山々は雪を残しているが、やわらかい光があたっている。

絶やしてはならない —緒方洪庵—

幕末、大阪を中心に活躍した一人の蘭学者がいた。緒方洪庵である。

洪庵は、文化七年（一八一〇年）、備中の国（今の岡山県）足守藩士の三男として生まれた。十六歳の時、父が蔵屋敷の留守居役に任ぜられたのに従って、大阪で生活を始める。ほどなく洪庵は、西洋医学を専門にする蘭学者の中天游に出会い、蘭方医になる決心をした。

天游のもとで熱心に勉強し、翻訳書を読み尽くすと、天游から原書を読んで勉強をするように勧められ、江戸の坪井信道の塾に入門した。そこでオランダ語の原書を数十巻読み込んだ。苦勞と努力の末に身に付けたオランダ語の力量は、信道の師の宇田川榛齋に認められ、榛齋の著書に書いてある薬の分量について、日本の人々に分かるように日蘭の換算表をつけてもらいたいと頼まれるほどであった。江戸にいる間にいくつかの医学書を翻訳した洪庵は、学者として名をあげていく。

その後、洪庵は長崎に蘭学修行に出掛ける。

江戸時代、人々から恐れられていた病気の一つが、人から人へとうつる天然痘で、毎年のように流行し、多くの人が命を失った。たとえ命をとりとめても顔に天然痘の痕が残ったり失明したりする者もあった。その頃医師たちは天然痘に一度かかると二度と発病しないことに気付き、人工的に軽い天然痘にかからせることを考えついていた。しかし、天然痘にかかった人の膿を、腕に傷を付けて接種する人痘種痘法は、それがもとで本当に天然痘になつてしまうこともあり、危険を伴うものだった。

長崎から足守に戻った洪庵は、五歳の甥と二歳の姪に天然痘予防のための人痘種痘を行つた。ところが、二人の腕は腫れ、発熱してしまった。幸い甥と姪の熱は下がり、ことなきを得たが、命を第一に考える洪庵

は、危険を伴う人痘種痘法を村の子どもたちへ施すことはできなかった。

西洋の医学書を読んでいた洪庵は、ジェンナー^{*}の牛痘種痘法を知っていた。牛痘種痘法は、乳牛を飼う人が牛痘にかかると、その後二度と人の天然痘にかからないという発見から開発されたもので、ヨーロッパでは安全性と有効性が認められていた。洪庵は、牛痘苗^{びゅうびょう}が日本に入ってくるのを今か今かと待ち続けた。

嘉永二年（一八四九年）、洪庵三十九歳の時、ついに、牛痘種痘に成功したとの知らせが京都の日野鼎哉^{ていさい}から届いた。かねて福井藩の笠原良策^{かさはらりょうさく}が、京都の鼎哉を通じ依頼していた痘苗が長崎から届き、種痘に成功したという。

「天然痘予防の痘苗が京都に来たぞ。」

日頃の洪庵らしくない上ずった声で、弟子の日野葛民^{かつみん}に告げると、大和屋喜兵衛の家に向かった。これで、天然痘にかかって命をなくす者がなくなるのだと思うと洪庵の足はひとりでに速くなった。

「洪庵先生、種痘を接種する場所は私が用意いたします。」

喜兵衛は蘭学者洪庵の良き理解者であり支援者であった。喜兵衛はすぐに近所の隠居所を借りて「除痘館」開設の準備を進めた。

これを見届け、洪庵と葛民は急ぎ京都に向かった。

「長い年月、待ち続けてきました。子どもたちを救ってやりたいのです。痘苗を分けていただけませんか。」

丁寧^{ていねい}に頼む洪庵をじつと見詰め、良策はしばらくして口を開いた。

「実は、この痘苗は福井藩御用のものなのです……。ですが、命を救いたいという思いは誰でも同じです。痘苗を絶やさないためにお分けします。」

「ありがとうございます。ついては、私どもは種痘のやり方が未熟です。ぜひ実地に教えていただきたいの

です。」

十一月七日、霜の降りた寒い朝、大阪の洪庵のもとに、良策と鼎哉が淀川を船で下ってきた。洪庵と仲間の医師たちは除痘館にうちそろって出迎えた。連れてきた一人の子どもの腕から、一人の子どもに痘苗を植えつなぐ儀式が厳おそかに行われた。そしてまた次の子どもにも。順々に八人の子どもにも苗を植えつないだ。

四日目に、良策と鼎哉は、子どもの腕を見ると、頬をゆるませた。

「大丈夫です。種痘は成功です。」

「よし、これで多くの命が救われる。」

洪庵とその仲間の医師たちは、希望に胸をふくらませた。ここに大阪での種痘の第一歩が始まった。

除痘館の種痘日は七日目ごとと決められた。

初めのうちは種痘に来る者があったが、間もなくぱたつと途絶えた。どうしたのかと調べてみると、種痘をすると牛になる、子どもに害があるとの風評が広がっていた。人々に効能の説明をしても、いったん立った風評を覆すことは並大抵のことではなく、町の人々は耳をかさなかつた。

漢方が支配していたこの頃は、西洋医学を理解する人は少数で、漢方医から、牛痘種痘法に反対する書物も出て、人命を救うために始めた種痘事業は、世間の無知と反対勢力の誹ひ謗ぼう中傷にさらされた。しかし、洪庵は諦めなかつた。洪庵は、門弟に指示して、種痘をする子どもを探させた。

「このままでは、痘苗が絶えてしまう。」

洪庵は、自腹を切つて金を出し、米や菓子と引き替えにしてまでも子どもに種痘をしていった。

「種痘によって、必ず命が救われるのだ。だから、一日に一人でもいい。痘苗を絶やしてはならない。」

洪庵の切なる願いが浸透するには時間がかかつた。

しかし、毎年のように流行する天然痘に、種痘をした子どもはかからないという実績が目の前に表れてき

て、町の人々は変わり始めた。

「先生、これで、子どもたちは救われます。」

門弟の言葉に、洪庵は目を細めてうなずいた。洪庵の前を「種痘済み」の証明書を持つ親子連れが次々と通っていった。

* * *

洪庵の設立した適塾は、日本の蘭学のメッカとなり、慶應義塾を創立した福沢諭吉、初代内務省衛生局長として近代医学の基礎を築いた長与専齋^{ながよせんさい}、日本赤十字社を創設した佐野常民^{つねたみ}等々、多くの人材を輩出した。

※注 ジェンナー：一七九六年、八歳の少年に牛痘を接種

し、天然痘予防に成功したイギリスの医師。



キミばあちゃんの椿つばき

「こんにちは、キミばあちゃん。」

裕介たちの学校では学期に一回、近くの一人暮らしの老人を訪問している。キミばあちゃんは今年七十八歳。長い間、大学で国文学を教えていたそう。大学の先生というのと、気難しそうに思われがちだけど、とても気さくで話好きである。

「よう来てくれたね。美紀ちゃん、佐織ちゃん、順ちゃん。あれ、裕ちゃんはいないのかい。」

訪問も三年目になって、キミばあちゃんを訪問して元気づけるというよりも、裕介たちの相談相手になってくれている。

「裕介ね。また入院したんだ。しばらくかかるらしい。昨日寄ってみただけど、あいつあんまり喋らなくて、黙っているのも気づまりで、せっかく行っただけど、すぐに病室を出てしまったんだ。……どうしたらいいのかなあ。」

順平が助けを求めるようにキミばあちゃんの方を見た。キミばあちゃんもすぐに順平の気持ちを察したようだ。

「難しいなあ、順ちゃん。でも心配している順ちゃんの気持ちは裕介にも分かるよ。」

それから四か月がたち、最後の訪問日となって、四人はそろってキミばあちゃんの家に行った。

キミばあちゃんは、みんなの顔を見るなり、すぐに裕介に調子はどうかと尋ねた。

「ここんとはまあまあなんですけど。すぐに具合悪くなっちゃうんで……。」

と、裕介は寂しそうに答えた。

「裕ちゃん、一人で悩むと落ち込むよ。裕ちゃんには心配してくれる友達もいるんだからね。」

と、キミばあちゃんは、裕介の背中をポンとたたいた。美紀も佐織もそうだそうだと言うようにうなずいた。

「うん。元気になるっていつも自分に言い聞かせているんだけど。ときどきね、……苦しくなるんだ。」

「苦しくなるって。」

「ずっと一生こんな風に病院を出たり入ったりするのかな、と思うと……。」

キミばあちゃんは、裕介の肩に手を置いて座らせ、優しい目で次の言葉を促した。

「親にも心配や迷惑ばかり掛けて心苦しいし、何のために生きてるのかな、生きていても仕方がないのじゃないかと思ったりすることもあるんです。」

いつもは感情をあまり表に出さない裕介の声が、震えているのに気付いた順平は、驚いて裕介の側そばに寄った。

「そうかい。」

キミばあちゃんは穏やかに言うと、立ち上がった。

隣の部屋から何冊かの本を手に戻ってくると、一冊を開いて裕介の前に置いた。そのページにはしおりがはさんであつた。

「裕介、この本は、『広瀬淡窓』たんそうと言う人のことが書いてある。七十五歳まで生きたんだけど、とても病弱だった人なんだよ。その淡窓が二十三歳の時に倉重湊くらしげなむらという医師に宛てた手紙と、その後のいきさつが書いてあるから読んでごらん。」

裕介は本を手に取った。

「生来、多病の私ですが、今最も憂えているのは、何を目標に生きて行けばよいかということです。幼い時から勉強に励んで来たことを生かして身を立てる以外にないように思うのです。そうするなら、どこかの藩に仕官するか、都へ出て自分で塾を開くかだと思っております。しかし、病気がちの私には務まりません。この日田で教師となることも考えましたが、この地で儒者として成功した人はいません。私も数年来、生徒を集めて教えていますが、とても生計を立てられるほどには人は集まりません。医師になることも考えたのですが、長い修行も必要ですし、だからといって農工商売もたやすいことではありません。どうすればよいのか悩んでいます。どうぞ解決の良い方法を教えてください。」

ところがなかなか返事が来ないので、待ちきれなくて淡窓は倉重に会いに出掛けて行った。

「確かに手紙は読んだ。趣旨はともかく、同じことをくどくど繰り返して、愚痴や恨み言ばかり並べて見苦しい。君の行くべき道はただ一つしかなく迷いようがないではないか。君の得意な分野で生きて行くことだ。教師では食えないと言うが、それはまだ真剣に教えていないからだ。私の見るところでは、まだ工夫や努力が足りない。不健康を理由に、だからだらした生活を送るならば、父母への最大の不孝だ。迷うことなく、ただ一筋に教師の道を進むべきである。」

倉重のこの言葉で、淡窓はこれまでの判断しかねていた気持ちに吹っ切って塾に専念することにした。

裕介は、ここまで読んで顔を上げた。キミばあちゃんが湯飲みを両手に包み込むように持ってこちらを向いている。順平は少し心配そうな顔つきで見ている。裕介は、広瀬淡窓はこの後どうしたのだろうという思いがわき上がって来た。そして病気はどうなったんだろうという思いも消えなかった。

「淡窓は、江戸時代に今の大分県の日田に『咸宜園』^{かんぎえん}という塾を開いたんだよ。『咸宜園』^{かんぎえん}というのは『『みなよろし』』という意味だね。身分にかかわらず、みんな勉強しに来なさいということなんだ。日本中から塾

生が集まってきたんだよ。

淡窓の病弱は治ったわけではない。いつも体中のあちこちに痛みがあつて、そのために何ヶ月も寝込んでんだだよ。なかなか辛抱できないような痛みも耐えて、懸命に頑張ったんだ。まあ、言ってみれば、病気をすればするほど少々の困難にはびくともしない精神的な強さを身に付けたんだらうね。自分だけが何でという思いもあつたとは思うけど。それを何かのせいにせず、前へ進もうとしたのが広瀬淡窓なんだよ。

あれあれ、ちよつとお説教臭くなつたかねえ。それなら、一つ面白いものを見せよう。淡窓のチャレンジだよ。」

キミばあちゃんは、黒と白の丸がずらつと並んだコピー用紙をみんなに配つた。右上に万善簿と書いてある。

「まんぜんぼ。」

四人が一斉に声を上げた。

「そう、『万善簿』と言つてね。淡窓が、今日から一万個のよいことをしようとした帳面なんだ。い



いいことをした時は白丸。悪いことをした時は黒丸。たとえば、生き物を大事にしたという時は白丸。体に悪いことをした時は黒丸。毎日帳面につけて、白丸と黒丸を計算して、今日は白丸がいくつ残ったというようにつけるんだ。私が一番好きなのは、黒丸が十個も書いているところ。何をこんなに悪いことをしたのかと書いてみると、『権藤生 死す』とある。権藤さんという塾生が亡くなったんだね。そして、『介抱不行き届き』と書いてあるんだよ。自分のところに来ている塾生が死んだからといって、これだけの黒丸を連ねているんだよ。気になって、帳面の少し前を見ると、今日は権藤生を見舞った。白丸一つ。今日は権藤生を見舞うつもりだったがいけなかった。黒丸一つと書いてあるんだよ。自分が病人なのにね。それでも、権藤さんが亡くなった時には、黒丸をいくつも連ねずにはいられなかったんだね。人柄が分かるね。」

「すごい人がいたんだね。とっても僕は広瀬淡窓とかいう人のようになれないだろうけど……。甘かったんだね。キミばあちゃん、ありがとう。」

祐介は、キミばあちゃんの手を取ってぐっと握りしめた。

「裕介、僕らも万善簿、いや、百善簿くらいやってみるか。」

美紀と佐織は、私たちもやってみようと言い出した。そして、庭を指差した。

「庭の椿がきれいだね。美しいものを美しいと思う、この気持ちに白丸一個。」

と、すまして言うと、キミばあちゃんは、窓を開けた。

「きれいだろう。あの椿。あれはね、冬の寒い中でもきれいな花を咲か



せる。そして、椿は最後の最後まで生き切る。だから私は好きなんだよ。あんな風に生きたいと思っているよ。そうそう五所平之助さんという人が詠よんでいる句があつてね。『生きることは一と筋がよし寒椿』、いいねえ。」

闇の中の炎

「ああ、だめだ。」

理沙は、描きかけのスケッチブックをビリビリと破った。

明日がコンクールに出す作品の下絵を提出する締切なのに、全然描けない。それどころか題材もアイディアも浮かばない。理沙は大きいため息をついた。

去年の作品は自分でも手応えがあった。先生もすぐ褒めてくれて、来年は入賞を目指せるよって励ましてくれた。期待してくれてるのに。今年は出品すらできないかもしれない。

不安と焦る気持ちを打ち消すように、理沙は本棚から一冊の本を取り出した。先週行った絵画展で父に買ってもらった画集だ。パラパラとめくっていく理沙の手は、あるページで止まった。理沙の目はそのページに釘付けとなった。暗い夜の闇の中に、赤い炎が燃えている。その炎の周りを囲んで座る人々の姿が描かれた版画だった。

たちまち理沙の中に、一つのイメージが浮かんだ。火と、それに引きつけられる人々。理沙はスケッチブックを取り出すと、一心不乱に描いていった。描ける。これならきつと。

翌日、理沙は美術部の先生に下絵を見せた。

「これは素晴らしいね。さすが庄司さんだ。」

「ありがとうございます。頑張ります。」

「この絵は何を描いたものなの。テーマは何？」

問われて、一瞬、理沙は言葉に詰まった。



「あの、えーと、去年の夏、キャンプファイヤーに行って、その時の思い出を……。」

「なるほど、そうか。これは仕上がりが楽しみだ。タイトルは？」

「キャンプファイヤーの夜、です。」

思わず口にしてしまったが、意外にいいタイトルかもしれない。理沙は嬉しくなった。頑張^{うれ}って作品を仕上げよう。絵の具を混ぜる理沙の心はずんだ。

「理沙、何やってるの。」

有紀の声に教室から窓の外を見ていた理沙はびくつとした。校庭ではサッカー部が練習を始めている。有紀はいつまでも美術室に來ない理沙を呼びに來たのだ。

作品は順調に仕上がってきている。同じ美術部の有紀も「いいね。」と楽しみにしてくれている。だから來るのが遅い理沙が気になったのだろう。締切は迫っている。

だが数日前から、筆を持つ理沙の手は止まりがちになっていた。色を作る時、キャンパスに絵筆をのせる時、理沙の心に何度となく、ある声が聞こえてくるのだ。

これでいいのかしら。なんだか人の絵を真似してるみたい。

ううん、と理沙は思わず首を横に振った。別に全部真似したわけじゃない。画集を見ていて自分のアイデアが浮かんだだけ。あの作品は版画だったし、私のは油絵。タッチも構図も違う。全然印象が違う。自分の絵には別のテーマもある。

手が止まるたびに、理沙は繰り返しそう言い聞かせた。これでいいんだ。

今日は一番大事な炎のところの色を加えていくはずだった。でも、何か気が進まない。それで美術室へ行くのを何となくためらっていたのだ。

「有紀、私、今日はお休みする。」

「ええ、どうしたの。大事な時なのに。何か用事なの。」

驚く有紀から顔を背けるように、理沙はかばんを持って教室を駆け出していった。

「あら、もう帰ってたの。どうしたの。」

作品の仕上げで連日帰りが遅い理沙が先に帰宅しているので、母は驚いた声を上げた。理沙は、

「ちよつと。」

とあいまいな返事をして口ごもった。

「ずっと集中してたから疲れが出たのかもね。そういう時は少し休んだ方がいいわ。今日はお父さんも早いよ。お母さんも理沙に負けずに美味しいもの作るから、期待してて。」

母の明るい声に理沙は少し笑顔になった。

家族揃った食事で、父は上機嫌だった。会話がはずんだところで理沙が口を開いた。

「ねえ、お父さん。有名な画家の作品を真似して描くのって悪いことじゃないよね。」

「なんだい、突然に。そうだね。いいなと思う作品を模写してタッチや色遣いを真似してみるのはいいい練習になるよ。自分らしいスタイルを作っていくためにも必要なことだね。」

「うん。それは分かっているけど……。」

いつもと違って歯切れの悪い理沙の様子に、父も何か違うものを感じたようだ。

「友達が……、あの、美術部の友達がコンクール作品を作ってるんだけど。別の作品からヒントをもらったって、そう言ってたから。私は、ただヒントをもらっただけなんだから、いいんじゃない、って答えたんだけど。だけど、ちよつと気になったから……。」

「ああ、理沙も描いてるコンクールの出品作か。他の人の作品を見てアイディアが浮かぶことは誰でもあるだろうね。そのぐらい気にすることないんじゃないか。」

父の言葉に理沙はちよつとほつとした。その様子を見て父は言葉を続けた。

「だけど、その友達は、気にしてるんだね。なんで気になるんだらうね。」

「うーん。分からないけど。」

「お父さんや理沙が、構わない、って言ったら、気にならなくなるのかな。」

理沙は黙ったまま、自分を見つめる父から目をそらした。

「その友達は、なんだか自分への言い訳を探してるように見えるな。そんな気持ちでいい作品ができるんだらうか。作品はずつと残るんだよ。」

顔を上げた理沙と目が合うと、父は優しい声で続けた。

「その友達の気持ちをもっと聞いてあげたらどうか。本当は、その子はもう分かってるんじゃないか。自分がダメだと思ったらダメだって。」

部屋に戻った理沙の胸に父の最後の言葉が響いた。

ずっと見ないでいたあの版画を理沙はもう一度開いて見た。暗闇に浮かびあがる赤い炎。その炎の筋が周りの人々をかすかに照らし出している。

画家はこの炎を見たんだ。闇の中で人々を照らす炎を。でも自分にはそれが見えない。この炎を見ていないから。暗闇の中で輝くこの炎を私は描くことはできない。

自分がダメと思ったらダメなんだ。

理沙はそつと画集を閉じて本棚に戻した。あの作品を完成することはできない。新しい作品を描き始めてももう締切には間に合わないだらう。でも……。

理沙はスケッチブックを取り出すと、夢中で鉛筆を走らせていった。

仏の銀蔵

昔々の話です。銀蔵という高利貸しがいました。銀蔵は、生活に苦しむ農民や職人たちに金を貸しては高い利子をつけてもうけていました。

毎日、銀蔵は借金をした人の家を回っては、貸した金を取り立てていました。その取り立ては厳しく、借金おぼの証文あかし綴りを前にして、

「さあ、払え。今すぐ払え。」と、小太りの体をゆすって大きな声を出すのです。そんな銀蔵を人々は恐れ、「鬼の銀蔵」と呼んでいました。

ある日のこと、銀蔵は、取り立ての途中、茶屋しやうぎに寄り、店先の床几しやうぎに腰を下ろし、洪茶をすすりながら好物の団子を食べていました。銀蔵は、時々懐ふとこに手を入れては取り立てた金の重みを確認して、ニタニタとしていました。その時、突然、一羽のカラスが、バタバタと舞い降りてきて銀蔵の団子の一つをひよいといばみ、さーっと飛び去っていきました。



「あつ。」

銀蔵は慌てて手を伸ばしました。なんと、団子の皿の横に置いてあつた証文の綴りがカラスの足に絡まり、あつという間にカラスと一緒に空に消えてしまったのです。

「あれがなくては、取り立てができない。」

銀蔵は、すぐに証文綴りを探して走り回りましたが見つかりませんでした。その出来事はあつという間に人々に伝わりました。

数日後、銀蔵がいつものように貸した金の取り立てにまわると、

「さて、銀蔵さん、私はいくらお借りしましたかな。」

「銀蔵さん、この前お返ししたじゃありませんか。」

「いつもの証文を見せてください。」

などと、人々は言うのでした。あまりにも多くの人にお金を貸していたので、さすがの銀蔵もそれぞれいくらか貸したのか、正確には覚えておりません。それに証文がなければ、借金の証拠がないから取り立てはできません。

「くそつ、カラスめ。」

銀蔵はカラスを憎み、証文綴りを必死になって探すのでした。しかし、どこを探しても証文綴りは見つかりませんでした。カラスのおかげで、銀蔵の厳しい取り立てから逃れられるのですから、借金をした人々は、ほっとしました。

「カラス様々ですな。」

「あのカラス様は神様の使いだ。」

「カラス大権現様。」

と人々は、カラスをたたえ喜びました。

取り立てできなくなり、がっかりしている銀蔵のところには、不思議な手紙が届きました。

〈証文綴りが欲しければ、十五日亥※注2の刻に、金現寺地蔵堂の賽銭箱さいせんに二十両入れ、地蔵堂の鈴を鳴らすことと、書いてあります。

銀蔵は、

「くそつ二十両か、だが、証文綴りが戻ってくれば、また取り立てができる。借金をとぼけたやつら、今に見ている。」

と、金貸しで貯めた二十両を賽銭箱に入れることを決めました。証文綴りが戻らと思った銀蔵は、

「今日は証文はないが、今度証文を持って来るから、その時までに残りの借金をそろえておけ。びた一文まけないからな。」

と、人々にいつも以上に厳しい態度を取るようになりました。慌てたのは金を借りていた人々です。人々は証文綴りが銀蔵に戻らないよう祈るのでした。

銀蔵は手紙の通りに、二十両を賽銭箱に入れ、鈴を鳴らしました。すると、上から紙切れが落ちてきて、その紙切れには「地蔵堂の裏に証文綴りあり」と書いてありました。銀蔵はすぐに地蔵堂の裏に走って行き、証文綴りを探しましたが、それらしきものは見あたりません。

「やられた。」

叫んだ銀蔵は、へたへたと座り込みました。はっと気が付いた銀蔵は一目散いちもくさんに賽銭箱にとびつき、二十両を取り出そうとしましたが、取り出すことはできませんでした。

すぐに銀蔵は寺の住職を起こし、二十両を返せと訴えました。住職が賽銭箱を開けると、銀蔵が入れたと思われる二十両がありました。住職は、厳おごそかに言いました。

「確かに二十両入っています。でも、銀蔵さんが入れたという証拠がないので、返すわけにはいきません。誰か銀蔵さんが入れたのを証言できますか。」

と銀蔵に尋ねました。もちろん、そんなものはいません。住職は、それなら銀蔵に金を渡すわけにはいけません。賽銭として、寺の普請（建築工事）に使わせてもらうと言いました。

「これは確かに俺の金だ。返せ、泥棒坊主。」

と銀蔵が言うのと、

「僧を泥棒呼ばわりし、賽銭を脅し取ろうというのか。この罰あたりめが。」

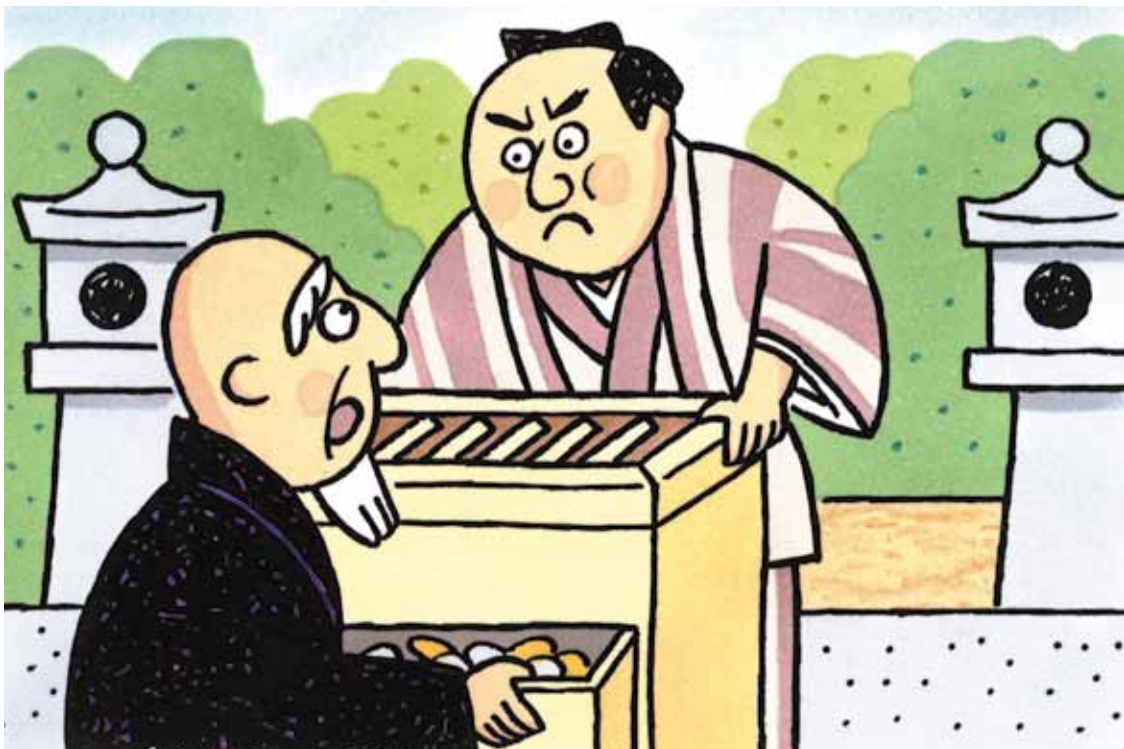
と住職は言い返しました。さすがに銀蔵は何も言えず、がつくりと肩を落とすのでした。このことが噂になると、人々は今度は、

「地蔵様の罰があつたのだ。」

「さすがお地蔵さん、南無地蔵大菩薩。」

と話し始めました。

銀蔵は、金貸しで稼いだ二十両も失い、人に貸す金もなくなりました。威勢のいい銀蔵の声は聞こえなくなり、銀蔵の生活は苦しくなり、とうとう銀蔵



は、食べるものを求めて農民たちの家をまわりはじめました。さすがに人々は哀れに思い、銀蔵に米や野菜を分けてやるようになりました。

しばらくしてからのことです。あれほど銀蔵を恐れ、憎んだ人々でしたが、不思議なことに、証文綴りがないのに、

「このくらいの借金があった。」

「このくらいなら返せる。」

と、銀蔵に借りた金を返す者が現れてきました。銀蔵は、いくら証文綴りを突き付けても借金を払わなかった人々が、一人また一人と借金を返し始めたことを不思議に思いました。銀蔵は、思い切って尋ねました。

「証文もないのに、なぜ借金を払うんだ。」

すると、人々は、

「貧しいが、盗人ぬすっとにはなりたくねえ。」

「お天道様てんとうさまが見てござる。」

と、答えるのです。

銀蔵は、それを聞いてぽかんとしました。銀蔵は腕組みをしたまま考え続けました。

「そうか、お天道様か。」



と膝を打ちました。

その後、銀蔵は、手元に戻った金でほぼそと商いを始め、以前のような金貸しをすることはありませんでしたとさ。

※注1 床几：数人掛けられる程度の横長に作った簡単な腰掛け台。

※注2 亥の刻：午後十時頃。

鳩が飛び立つ日 ―石井筆子―

明治の初め、華やかな鹿鳴館で、訪れたドイツ人医師に『私がこれまで出会った最も魅力的な女性』と称賛された一人の女性がいました。限られた家庭の子女しか教育を受けられなかった時代。フランスに留学し、華族女学校の教師として日本の女子教育に奔走していた筆子（石井筆子）です。明治三十五年（一九〇二年）、筆子らの努力で女子教育が充実しつつあったある日、筆子はもう一つの道へと進もうとしていました。



女学校の校長室の窓から、外に広がる緑がまぶしく輝いている。明るい光が差し込む校長室の机を筆子は慈しむように見つめた。日本の未来を築く女子を育てる。その筆子の夢を支えてきた学校を、今日、筆子は手放そうとしていた。

「強い人は弱い人を助けなければなりません。」

筆子の耳に、ふと、遠い日に聞いた言葉がよみがえった。

あれは、筆子が女学校の教員になったばかりの頃、ある英語講演の同時通訳をした時だ。講師はアメリカ先住民のための学校を設立した女性。彼女の父がいつも彼女に教え聞かせていた言葉だという。困難の中で意志を貫き通した女性の姿は、自信にあふれていた。筆子はいつしか自分自身に問い掛けている。

「私にできることは何だろうか。」

当時、筆子は、生まれたばかりの次女の病気の看病に追われながら仕事を続けていた。三歳の長女には知

的障害があることも分かった。明治半ばの日本、知的障害のある人には、学ぶ場所も働く場所もない時代だった。筆子の華やかな活躍を知る世間の人々は、「かわいそうに」と筆子に同情の目を向けた。私は負けな
い、と筆子は思った。日本の将来を担う日本人女性たちを育てることが自分の仕事。筆子はきっぱりと前を
見つめた。

生まれつき病弱だった次女恵子は、わずか一歳で亡くなった。その悲しみが癒されない中で生まれた三女
の康子にも障害が見つかる。更に追い打ちをかけるように、筆子の仕事を理解し、支えてきた夫も、病でこ
の世を去った。筆子と子どもたちを残して。

筆子たちの努力で日本の女子教育は実を結びつつあった。だが、筆子の心には晴れない思いがあった。自
分の娘たちはこのまま社会の片隅でひっそりと生きていくのか。

「私にお嬢さんを預けませんか。お嬢さんのような子どもたちのための学校を創って、教育を受けさせたい
のです。」

そう言ったのは、筆子の学校に講師として招かれた石井亮一だった。〈教育？〉筆子は亮一の言葉に驚いた。
母である筆子ですら、娘たちは社会の重荷なのだと思っていたのだ。

「この子たちに教育を？」

不思議そうな顔の筆子に、亮一は力強く理想を語った。アメリカに留学して最先端の障害児教育を学んだ
亮一は、ふさわしい環境があれば知的障害児もその子の歩みで学び、育ち、社会で働くこともできる、と確
信していたのだ。その夢に、筆子の心は踊った。

この夢を実現させたい。自分もその役に立ちたい。

亮一の歩む道を共に進もう。そう決意して、筆子は、これまで育ててきた女学校を仲間の一人に譲り渡し
たのだった。女学校の校長室の扉を閉め、筆子は亮一のもとへ向かった。

亮一は、滝乃川学園を創設し、親を失くした子どもたちや障害のある子どもたちへの教育を充実させようとしていた。筆子は一教師として子どもたちに向き合い、自らも障害児教育について学んでいった。その情熱は、二人の心を強く結び付けた。筆子は亮一と結婚し、学園の充実に奔走する。ゆっくりと確かに学んでいく子どもたちのたくさんの笑顔が、日々の苦勞を乗り越える大きな力を与えてくれた。

次女恵子、三女康子を病で失くした筆子の元には、長女幸子だけが残されていた。学園の子どもたちと共に成長していく幸子の姿は筆子の心の支えであった。その幸子も、入退院を繰り返した後、筆子に看取られて目を閉じた。筆子は初めて声をあげて泣いた。幸せになって欲しいと願って名付けた幸子、豊かな恵みがありますようにと名付けた恵子、そして、健康に育って欲しいと思いを込めた康子。大切な娘たちの誰一人として幸せにしてやれなかった。突き刺すような痛みが胸に迫った。

筆子は幸子が学園で描いた絵や刺繍入りのハンカチを手にとった。その一枚に小さな鳩が刺繍されていた。仲間たちと一緒に一針を丁寧に入れる姿が目に見えぬ。広い世界へ飛び立つ日を迎えられなかった娘たち。ハンカチを強く握りしめ、筆子は再び強くなろうと決意した。学園の子どもたちを守り育てるのが自分の使命だ。あの子たちがいつも笑顔で暮らせるように支えていこう。苦しいことも辛いことも、子どもたちと一緒に乗り越えていこう。

大正九年（一九二〇年）の秋、筆子が学園の教育に取り組んで二十年が経ったある夜、学園で火災が発生した。大火に襲われる中、筆子たち職員は必死に子どもたちを避難させた。さらに火の中へ入って子どもを救おうとして、筆子自身も足に大きな怪我をしてしまう。この火災で、園児六人の命が失われた。火事の原因は、一人の子どもの火遊びだった。

火で遊ぶことの危険が分からない子ども。火が目の前に迫っていても、怖さが分からない子ども。そし

て、恐さのあまり、逃げることもできず布団にうずくまって死んでいった子どもたち。自分が何もできなかったことに、筆子は立ちすくんだ。

社会から見放された子どもたちを守るのが自分の使命。そのために強くならなければ。そう決意してここまで歩んできた。だが、その子どもたちを目の前の危険から救ってあげられなかった。助けを求めていただろうに。迫りくる火の中でどんなに苦しんだらうか。

誰一人、守ってあげられなかった。自分の使命などと、なんという思い上がりだろう。

亮一も同じ思いだったのだろうか。学園の廃止を決意した亮一に筆子は黙ってうなずいた。この先、一生、亡くなった子どもたちを思っぴっそりと生きていこう。

ところが、筆子の元に、学園の廃止を知った人々からたくさんの方が寄せられた。学園存続のために寄付金を送ってくれる人。筆子が教えた卒業生からも。筆子の故郷からも。

励ましの手紙を読む筆子の眼前に故郷の海が広がった。少女だった頃、切り立つような坂道を一気に駆け下りると、突然視界が開け、青い海が筆子を受け止めるように広がっていた。入り組んだ湾に重なりあう島々の深い緑の中から、一羽の鳥の影が水面を低くかすめ、やがて青くどこまでも広がる大空へと、高く、遠く飛び立っていった。

助けられなかった子どもたちの声が聞こえる。〈せんせい。〉と呼ぶ声がする。

私には子どもたちの声が聞こえる、と筆子はつぶやいた。自分は強かったのではない。あの声に助けられていたのだ。その声に応えよう。応えなければならぬ。私が、私たちが、この社会の中にあの子たちの居場所を創るのだ。もう一度、そして、何度でも。

筆子は、亮一と共に学園を再開した。学校で学び、社会で働く。その可能性が全ての人に開かれた社会へ。筆子の歩みは、最後まで止まることがなかった。

ロッキングローラー

「浩美、ついにビッグスターが来るぞ。」

商店街の会合から帰ってきた父が叫ぶように言った。

「えっ。ビッグスターって誰。とりあえずサインもらいに行こう。」

「そうじゃなくて、大型スーパーの全国チェーンの『ビッグスター』だよ。あれがついに隣町にできるらしい。今日はその話で持ちきりだったよ。お客がそっちにばかり買い物に行ってしまったら、この銀転商店街の運命はどうなるんだ。」

「まあ……私も行くねえ。でも、うちの商売には関係ないでしょ。そば屋なんだからさ。」

「全くお前は何も分かってないな。最近の大型スーパーってやつは、『複合施設』って言って、専門店がいっぱい入ってるんだよ。俺はチェーン店のそば屋も絶対入ると見た。そこでついでに食べて行こうということになるからな。うちは味もいいし、こまめに出前もするんだけど、一回来てもらわないことにはなあ。」

「ははは。三代続いたうちの店も、父さんの代でついにおしまいかあ。」

「そうになったら、お前の学費は誰が出すんだよ。ギターなんかいじってないで、店手伝え。そば屋の跡継ぎに音楽はいららないよ。出前だ出前。まずクリーニング屋と本屋。」

とんだとぼっちりだ。私は跡継ぎになるなんて、一度も言ったことはないし、趣味でバンドやるくらいいいじゃない。自分の家の手伝いでは一銭にもならないのだが、大学の高い学費を出してもらっていることを思えば、出前要員として使われるのは仕方なかった。

まずクリーニング屋の裏口から「そば屋です。」と声を掛けた。奥からおばあさんが現れた。クリーニン

グ屋の仕事はおじさん夫婦がやっているのだが、おばあさんは八十歳過ぎても、奥でそろばんをはじいて会計を一手に引き受けている。

「浩美ちゃん、いつもすまないねえ。本当なら店に食べに行きたいんだけど足が弱くてさ。」

「いやいや。そば屋は出前やってなんぼですから。」

「なんとかスターが来るらしいね。便利にはなるかもしれないけど、近くに商店街もないと車が運転できない年寄りには困るよ。なんとか商店街を元気にする案はないもんかねえ。」

「あ、私、まだ本屋に出前しないといけないので、失礼します。」

「本屋といえば、あそこの潤ちゃんは昔インテリだったから、いい案があるかも……。」

おばあさんの話は延々と続きそうだったので、私はバイクに飛び乗った。よく考えてみると、本当にこの町は大学生とお年寄りばかりだ。商店街の元気なおじさんたちも、あと何年かしたら「お年寄り」の仲間かもしれない。「本屋の潤ちゃん」も六十いくつか。

「こんにちは。そば屋です。」

「おう。ヒロか。父さんからビッグスターのこと、聞いたか。」

「女子大生つかまえて『ヒロ』はやめてくださいよ。しかも今日はどこ行ってもその話ばかりだし。でももう、しょうがないでしょ。決まっちゃったものは。時代の……。」

「これだから平成の若いもんはダメ。すぐ『時代の流れには逆らえない』とか言うんだよ。昭和の若いもんは……まあ俺たちのことだけどな、時代にもっと関心をもってたよ。」

「そういえば、クリーニング屋のおばあさんが『潤ちゃんは昔インテリだったから』どうとか言ってたなあ。ところで、インテリってどういう意味なの。」

「はあああ、情けない。ちゃんと大学に行ってるのか。勉強しないやつは『大学生』って言えないよ。……」

そうだ。大学生がいるじゃないか。ヒロ、友達集める。町興おこしだ。ナイスアイディアが浮かんだぞ。よし、俺も久々に仲間集めて……やるかあ。」

「えーっ。『仲間集めて』ってどういうこと。しかもなんで私が。」

雲をつかむような話だと思ったが、私はまず、バンドの友達に相談した。

「たしか、うちの大学に地域興しのサークルがあったぞ。でもどこに聞いたらいいのかな。」

「学生課に聞いてみたら分かるんじゃないか。」

学生課に聞いてみると、大学も地域に貢献する活動を推進していることや、そのためのサークルがあることも分かり、サークルの代表者に会って話をする事ができた。

潤ちゃんと相談の結果、第一回の会合は、土曜日の夜に本屋で行うことになった。大学生は私とバンド仲間、サークルの人たちの合計六人だ。サークルの一人が言った。

「この本屋さんよく来るんだ。大きなチェーン店と違って、ここのおじさん、本の情報なら何を聞いても答えてくれるから。ものすごく物知りだよ。」

私は父さんが「チェーン店と違ってうちはこまめに出勤をする。」と言っていたことを思い出した。

二階のドアを開けると、全員六十歳過ぎと思われる「潤ちゃんの仲間」が十人近く集まっている。何だか知らないけど、迫力のある人たちだ。「平成の若いもん」と「昭和の若いもん」は自己紹介をし、早速商店街を活気づけるための話合いを始めた。壁には潤ちゃんが毛筆で「テーマ・共存」と書いた半紙が貼ってあるのはいいとして、もう一枚の「生涯ロックンローラー」と書いた半紙は、今回のことと関係あるのだろうか。話合いの結果、まずは大学生にもっと商店街を知ってもらおうということで、いろいろなアイディアが出た。話を聞いていた私も、段々楽しくなって、他の友達にも声を掛けてみようと思った。格安でチラシを

刷ってくれることになった文房具屋のおばさんに、潤ちゃんが「チラシの真ん中は、メインイベントの紹介をどーんと頼むわ。」と言った。

「メインイベントって。」

かげんな顔をする私に、潤ちゃんがにやつと笑った。

「名付けて『銀転商店街ロックフェスティバル』。ヒロたちのバンドと俺たちのバンドの勝負だな。大学には他のバンドもあるだろう。みんなで集まって勝負しようや。お子様バンドには負けんぞ。なあ、みんな。」
潤ちゃんの仲間がそれに応えて「オー」と一斉に拳こぶしを突き上げた。

「おじさんたち、元気ですね。」

「あたりまえよ。ロックンローラーはいつだって元気だよ。一回目はきつかけづくりだけど、ビッグスターとの共存を目指すには、もっと壮大なアイデアが必要なんだ。ヒロ、ロックフェスティバルに来て、みんながみんな自分の目当てのバンドの演奏だけを見て帰るわけではないだろう。そしてたまたまその会場で聞いたバンドのファンになってしまうこともあるんだよ。ビッグスターのファンを、銀転商店街のファンにもできるってことだ。」

「なるほど。そういうことですね。」

「いやいや。まあ、そば屋の四代目もなかなかの行動力だ。ここからの頑張りによっては、銀転商店街のロックンローラー仲間と認めてやってもいいな。」

「銀転商店街四代目か。悪くないね。みんなで集まると、いいアイデアが出るね。よし。」

そう言って立ち上がった私に、潤ちゃんはこっと笑ってうなずいた。



眞の国際人 — 嘉納治五郎 —

東京オリンピック開催が決定した直後、ベルリンで嘉納治五郎は語った。

「私が生んだオリンピック・ムーブメントは、ついに実を結ぶことができた。従来のオリンピックは欧米だけで開催され、オリンピックの本当の意義を発揮できなかったが、次回の第十二回大会は東京で行うことになった。これによってオリンピックが眞に世界的なものとなる。同時に日本の眞の姿を外国に知らせることができるので、二重の意味で愉快である。」

嘉納七十五歳、国際オリンピック委員会（IOC）の委員に就任してから、はや二十五年が経っていた。

二十五年前の明治四十二年（一九〇九年）、東京高等師範学校の校長をしていた嘉納に、突然、駐日フランス大使が会見を申し込んできた。用件は、IOC委員になつて欲しいということだった。

フランスのクーベルタンは同志と共にIOCを組織し、古代オリンピックゆかりの地アテネで一八九六年に第一回オリンピック大会を開催していた。国際オリンピック委員会は、欧米の委員で組織されており、アジアからの委員は一人もいなかった。嘉納はこの申し出を躊躇ちゆうちよすることなく受け入れた。アジア初のIOC委員の誕生だった。

次の年、嘉納のもとにクーベルタンから、二年後に行われる第五回ストックホルム大会参加の勧誘が届けられた。

「古代オリンピックがギリシャ民族の精神性を築いたように、近代オリンピックは世界各国の思想感情を融和し、世界の文明と平和を助くるものだ。また勝敗を超越して、相互に交流を深め、親善関係を深めるこ

とができる。」

そう考えて、嘉納は、参加を決意した。

ところが、代表選手を送ろうにも、選考会の組織も何もなかった。そこで嘉納は、選手の派遣と国民体育の振興の二つをねらいとして、さまざまな苦勞の末、新たに「大日本体育協会」を立ち上げた。それが日本で初めて創られた体育団体だった。

初めてのオリンピックへの派遣選手はわずか二名であったが、参加を重ねるにつれて人数も増え、入賞やメダルを獲得する数も増し、次第に日本国民の間にオリンピックに対する理解も広がっていった。

そこへ、東京市会がオリンピック開催要望を決議した。昭和十五年（一九四〇年）の第十二回オリンピックを東京で開催したいというのだ。この時嘉納はすでに七十一歳になっていたが、IOC委員としてオリンピック招致活動に動き始めた。

嘉納は、IOC総会で、東京開催の場合の組織、競技場、経費について説明したり、日本のスポーツ写真を配布して招致活動を行った。また、船での長旅をもとめせず、世界を飛び回り、各国のIOC委員と個別に面談するなど、東京への招致を目指して奮闘を続けた。しかし、日本開催を反対するIOC委員は実に多かった。

「ヨーロッパから日本に行くには、船でアフリカ、インド洋を経て日本に行くか、北米回りの航路か、またはシベリア鉄道でソ連を横断して日本に入るかのいずれかのコースだ。いずれにしても二十日間近くもかかる。費用もかかりすぎる。」

と言うのだ。それに対して、嘉納は決然として言った。

「そのような遠距離から、日本は明治四十五年（一九一二年）以来、毎大会多くの選手を派遣しています。ヨーロッパの選手が日本に集まることで、オリンピックが欧米のものから世界のものになるのではありません。」

んか。」

実に流暢な英語での反論であった。相手の論理を自分の論理に引き寄せたのである。相手の力に逆らわずして勝つという柔道の理念そのものだった。そして、オリンピックの東京開催が決まった。

嘉納には、オリンピックを真に世界的な文化にするべきだという強い思いがあった。それは、講道館柔道によって形成された武道的精神とオリンピック精神を融合させるといふ考えであった。嘉納の武道的精神は、身体と共に心を練り、そこで得たものを社会に応用していくことを目指すものであった。オリンピック精神は、スポーツを通して心身を向上させ、さらには文化・国籍など様々な差異を越え、友情、連帯感、フェアプレーの精神を持って理解し合うことで、平和でよりよい世界の実現に貢献するものである、とクーパーベルタンが提唱している。嘉納は、これこそまさに、自分が抱く理念と同じであり、二つの精神の融合によって、オリンピックが真の世界の文化になると確信した。

嘉納は、これまでの自分の柔道の道、教育者としての道、I O C委員としての道を、静かに振り返った。

嘉納は万延元年（一八六〇年）、兵庫県御影の酒造業の三男に生まれ、十二歳で東京に移り、明治六年（一八七三年）、育英義塾の寄宿舎に入った。明治維新からまだ日も浅く、武術で鍛えた者が幅をきかせていた。生来負けず嫌いの嘉納は、学問では誰にも負けなかったが、小柄で虚弱な身体であったため、腕力でも勝ちたいと思って柔術の道場に通い始めた。

熱心に稽古を続けていくうちに、体が強健になり、また、癩癩もちで容易に激するたちであった自分に自制心がついてきたことに気付いた。嘉納は、柔術は相当の工夫をすれば、心と体の教育の手段に有効であるという確信を得た。そして、二十一歳の時、これまでの柔術を改良して、北稻荷町永昌寺において講道館柔道を創始したのだった。

東京大学を卒業して、学習院や熊本第五高等学校に勤めた嘉納は、積極的に柔道を取り入れていった。三十三歳で東京高等師範学校の校長になると、青少年の体を強くするのはもちろんのこと精神的な向上を図るのは、体育・スポーツだと考え、生徒に陸上大運動会・長距離走・水泳実習などを行わせた。そして、柔道部や剣道部などとともに、ローンテニス部、フットボール部、ベースボール部、ラグビー部など西洋スポーツも課外運動部に取り入れた。

青少年に柔道や長距離走、水泳実習などの体育を行わせることは、体を強くさせるだけでなく、常に正々堂々とし、公正公平に身を処し、驕りたかぶらない精神を向上させることができる。嘉納は考えた。これこそ伝統的な武道に流れている精神だ。多くの卒業生たちがこの精神を全国各地に広げていった。

嘉納は、オリンピックの東京開催を勝ち取って安堵の思いで、会場となったホテルのロビーに出てきた。走り寄ってきた記者に満面の笑みを見せ、大きくうなずいた。そこには嘉納の面目躍如たるものがあった。

* * *



氷川丸船上の嘉納治五郎（右端）

嘉納の半生を捧げたといってもよい第十二回東京オリンピックは、幻のオリンピックとなった。嘉納が亡くなって二ヶ月後、戦時色が濃くなる中、日本は大会開催を返上した。

日本が再びオリンピック開催に名乗りを上げたのは、戦後のことであった。

その折に、誘致のためのスピーチをしたのは、カイロからの帰途、氷川丸の船上で帰らぬ人となった嘉納治五郎の臨終に立ち会った平沢和重だった。平沢はこんな演説をした。小学校六年生の国語の教科書を右手に高くかざして。

「日本では、小学校の教科書にも、オリンピックの精神が説かれています。日本の子どもたちは、その目でオリンピックを見ることを、どれほど待ち望んでいるでしょう。日本をFar East（極東）と呼びますが、ジェット機が飛ぶ今では、もはやFar（遠い）ではありません。遠いのは国同士、人同士の理解です。西洋に咲いたオリンピックという花を東洋でも咲かせていただきたいのです。」

会場は万雷の拍手に包まれた。ここに嘉納の心は受



け継がれた。

昭和三十九年（一九六四年）十月十日、真つ青な空に白い輪がくるりくるりと五つ描かれ五輪となり、ギリシヤを発ち各国をリレーした聖火が、聖火台に点火され、勢いよく燃え上がった。アジアで最初となった念願の東京オリンピックの開催である。日本選手は赤のブレザーに白のスカート・白のスボン、日章旗を先頭に堂々の入場行進をした。そして、柔道がオリンピック史上初めて正式種目となった。嘉納治五郎没後二十六年後のことである。

海と空 ― 櫻野の人々 ―

「助かった。」

救援機の車輪がテヘラン空港の滑走路を離れた瞬間、私は「ああ、やっと戦禍のテヘランを離れることができた」と実感した。周りを見ると家族連れの多くは抱き合って泣いている。

昭和六十年（一九八五年）三月、イラン・イラク戦争のさなか、イラン在留の日本人たちは、テヘランから脱出しようとしていた。しかし、テヘラン空港に乗り入れていた各国の航空機は自国民を優先するため、日本人の搭乗の余地はなかった。私を含め日本人の全てが不安と焦りの中にいた。その緊迫した状況の中で救いの手が差しのべられた。トルコ政府が取り残された日本人救援のために飛行機を出してくれたのだ。こうして私を含めた二一六人が無事脱出できた。危機一髪だった。

なぜトルコ政府が救援機を出してくれたのか。なぜトルコだったのか。この疑問を持ったまま、二十年近くも経ったある日、偶然、「イランからの脱出く日本人を救出したトルコ航空く」というシンポジウムがあることを知った。私は次の日曜日、予定を変更して、電車を乗り継いでM市へ出掛けた。

シンポジウムでは、トルコ政府が、飛行機を出してくれた背景に、トルコ人が親日的であることが強調されていた。そして、トルコ人が親日的になった第一の理由として、エルトゥールル号の遭難者を救助した野の人々の話があることを知った。

しかし、親日的であるということだけで、あの危険な状況の中で、自国の国民よりも優先して日本人の救出に当たれるものだろうか。シンポジウムを聞いても、私の疑問は完全には解消しなかった。どうしても櫻野に行ってみなければ、エルトゥールル号遭難の顛末を知らなければならぬと思った。

和歌山県串本の向かいの大島に檜野はある。今では、巡航船ではなく橋が架かり車が行き交う。私が妻と一緒にトルコ記念館を訪れたのは春の暖かい日だった。

展示室は思ったよりもこじんまりしていて、エルトゥールル号の説明、写真や手紙などをじっくりと見て歩いた。しかし、まだ私は納得できず、いささか失望の思いで展示室を出ようとしたところ、出口のところに、分厚いファイルが置いてあることに気付いた。手に取ってみると、『難事取扱二係ル日記』と記されている。当時の大島村村長の沖周おきまのなみがエルトゥールル号遭難の経緯と事故処理について書き綴つづったものだった。ページをめくってみると、旧字体と片仮名を使ったもので、読みやすいとは言えなかったが、何か分かるかもしれないと思い日記を読み始めた。

しばらく読みふけり、ふと目を上げた時、館長が声を掛けてきた。

「ずいぶんと熱心にござらんになっていますね。」

「最初は商船だと思っていたのですね。軍艦だと知って驚いたでしょうね。救助活動としかるべきところへの連絡、事故処理等すごいですね。」

館長は、何かの研究かと尋ねてきたので、私は、イランからの脱出と、シンポジウムのことを話した。

「そうですね。大変な思いをなさったのですね。」

「でも、まだ何だか分からないのです。なぜトルコの救援機が危険を冒してまで日本人を救出してくれたのか。」



館長は、私の言葉に頷いた。

「私も、沖日記を読みました。そうした公的な記録と共に、エルトゥール号遭難時の檜野地区の様子を伝える話もあります。おじいさんやおばあさんから直接、トルコ人救出の話が伝わっているのです。」

あれは、明治二十三年（一八九〇年）九月十六日夜のことでした。この大島は串本に近い大島区、中部の須江区、そして東部の檜野区の三つの地区からなっていました。その東部の先に檜野崎灯台というのがあります。話はその灯台から始まったのです。

檜野崎灯台の入り口の戸が激しくたたかれた時、時計は夜の十時半を指していました。当直の乃美さんが、扉を開けると暴風雨の中から一人の外国人が倒れこんできました。乃美さんはびしょ濡れの外国人を抱きかかえて中に入れ、明かりの下でみると、服はあちこちが裂け、顔も手足も傷だらけでした。急いで同僚の瀧沢さん（たきざわ）を呼びました。二人の灯台職員に外国人は、身振り手振りできかんに何かを訴えます。瀧沢さんはその様子から、海難事故であると分かりました。それで、奥の部屋から万国信号ブックを持ってきてペー지를繰りながら尋ねました。

「どこの国ですか。」

その男は、しっかりと赤地に三日月と星の国旗を指差しました。それはトルコの国旗でした。

瀧沢さんは、用務員を檜野地区の区長のもとに走らせるとともに、自身はその男の手当をし始めました。そうこうするうちに、次々と助けを求めトルコ人たちが灯台にやってきました。

他方、トルコ船の遭難の知らせを受けた檜野の人々は、急いで灯台下の断崖に向かいました。恐怖と疲労のあまり口も聞けないトルコ人を、檜野の人々は、両側から支え、歩けない者は背負い、灯台と檜野の村に運び込んだのです。

檜野の人々は、村の家々から浴衣ゆかたを集めて、トルコ人の濡れた衣服と取り替えさせました。でも、なかなか冷えた体の震えは止まりません。檜野の人々は、一晩中、手や足、背中と体中をこすって温め続けたそうです。

朝までに六十九人のトルコ人が救助されました。

困ったのは、食料でした。檜野地区の人たちは海に出て漁をしていたのですが、この年、漁獲量が減っていましたし、米の値段も上がっていました。だから蓄えた食料もほとんど無かったと言ってよいと思うのです。

ところが、檜野の人々は、トルコの人たちに取りつただけの食料を提供しました。

「これでサツマイモは全部だな。」

「ああ、畑には何にも残つとらん。」

その時、一人の長老が穏やかに、しかし力強く言いました。

「トルコの方は大勢いなさる。畑のものだけでは足りんから、みんなの家のニワトリをさばくことになるが。」

……みんな、ええな。」

即座に、赤銅色に日焼けした男が太い声で答えました。

「当たり前じゃ。いざという時のために飼つとるニワトリじゃ。わしらもトルコの方も一緒じゃ。食べてもらおうや。」

「そうや、そうや。元気にお国へ帰ってもらいたいからなあ。」

非常用のニワトリを差し出すことに、誰一人たりとも難色を示すものはいません。

「檜田さん、コックの腕のみせどころや。頼むで。」

「いやあ、この年で、お役に立てるとは。おかあちゃんたちも手伝うてや。」

榎田さんは、以前に灯台に勤めていた英国人のところでコックをしていたことがあり、専ら調理を引き受けました。ニワトリを追いかけ捕まえる人、サツマイモを洗う人、火をおこす人、腕わんを運ぶ人、榎野の人々の心づくしの洋食がたっぷりとふるまわれ、負傷者は元気を回復していきました。

この後、榎野地区の畑には、一個のサツマイモも無く、家に一羽のニワトリも無かったということです。

エルトゥールル号は、トルコ皇帝の命を受けて、答礼として明治天皇に親書と勲章を贈呈するためにやって来ていました。無事任務を果たした特使オスマン・パシヤー一行を乗せたエルトゥールル号が榎野崎灯台下で遭難したのです。榎野の海から生還した六十九人は、明治政府の計らいにより軍艦「比叡ひえい」と「金剛こんごう」によって、無事トルコに送り届けられました。しかし、大多数の乗員は故郷へ帰ることはかなわず、水平線の見える榎野崎の丘に手厚く埋葬されたのです。

トルコ記念館を出た妻と私は、海を右手に見ながら榎野の丘に続く小道をたどった。

「百年以上も前だったのねえ。」

「そうだったんだなあ。」

私の脳裏には、イランからの脱出のこと、先日のシンポジウムのことなどが脈絡もなく浮かんでいた。



故国を遠く離れた異境の地で、しかも荒れ狂う嵐の海で、生死を分かつ危機に遭遇したトルコの人たちと、テヘランの空港で空爆の危機に瀕した私たち日本人とを重ね合わせてみた。

私たちは国際的規模の相互扶助によって助けられたことは確かだ。樫野の人々は、ただ危険にさらされた人々を、誰かれの別なく助けたかったに違いない。その心があつたからこそ、百年の時代を経ても色あせることなくトルコの人々の中に、親日感情が生き続けているということであろう。トルコが救援機を出してくれたのも、危機に瀕した人々をただ助けたいと思ったからに違いない。私は長年の疑問が氷解して行くような気がした。

私は、樫野の海を見た。

「海と空」

それが水平線で一つになっていた。

「第二章

読み物資料の活用例」

町内会デビュー（1―3） 1～2年）

一 ねらい

自主的に考えて自分を律して生きていこうとする道徳的実践意欲を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

本資料の道徳的論点は、他律の状態から、自主的に判断し自律的に行動しようとは変化したところにある。はじめ母に言われていやいや町内会の作業に参加した明が、作業の中でお年寄りにはきつい作業を、自ら進んでしようとするところを中心として生徒に考えさせることが大切である。

(2) 資料の概要

町内会の草刈り作業に家庭の代表として参加して欲しいと母親から頼まれた明は仕方なく参加する。町内会の人に教えられながら草刈り作業をしていくうちに、お年寄りには重労働である仕事があることに気付き、自ら進んで作業をする。そのことによって、町内会の人々に、中川家の代表として受け入れられる。自分も少し大人になったような気がし、母のカレーが甘いと感ずる。翌日から自ら進んで町の人々とかかわろうとする。

三 展開例

- 黙って台所を出て行った明は、どんなことを考えていただろう。
 - ・家の事情は分かるけど嫌だ。
 - ・知らない人の中で、浮いてしまうのが心配だ。
 - ・部活動も休まなければならぬし、どうにかならぬのか。
 - ・お母さんの頼みだし、仕方ないか。

○ ザクツ、ザクツと草を刈っている明はどんな気持ちだったのだろう。

- ・嫌だった気持ちがなくなった。
- ・いい気分。
- ・ほめられてやる気が出た。

◎ 明はどう考えて「よし。」と草や木を集めて運び始めたのだろう。

- ・力のいる仕事は、若い僕にできることだ。
- ・年寄りには大変そうだ。
- ・草を刈っているより、こっちをしてあげたほうがいい。
- 背筋を伸ばして大股で学校へ向かった明はどんなことを思っていただろう。
 - ・いつまでも子どもじゃないんだ。もう中学生なんだ。
 - ・これからは自分でいいと思ったことはどんどんやろう。
 - ・中川家の代表だもんな。あいさつもちゃんとしなくては。

■ 「心のノート」の「自分のことは自分で決めたい」（二十六～二十九頁）を活用し、自主自律について考えさせることができる。

四 指導上の留意点及び工夫

- ・「背筋を伸ばして大股で学校に向かった明はどんなことを思っていただろう。」の代わりに「いつもの母の味のカレーがちょっと甘いと感ずるのはなぜか。」と聞くこともできる。

スイッチ (1―3) 2～3年)

一 ねらい

自主的に考え、自律の精神を重んじ、誠実に実行しようとする道徳的実践意欲を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

中学生の時期は、干渉されずに自分の力で物事をやりたいという気持ちが高まるが、困難に直面した時には他人に依存しがちである。本資料は、指導者不在により、頼る者がいないことに不安を抱く主人公の姿を通して、顧問の先生への依存心に気付かされる。ライバル校の監督の「試されているんだぞ。」という言葉をつかき、依存心乗り越え、自主的に考えて行動しようとして切り替えていくところを中心に生徒に考えさせたい。

(2) 資料の概要

主人公の絵里は、全面的に頼っていた顧問の坂先生が入院で不在の中、卓球部のキャプテンに選ばれる。「坂ノート」を頼りに練習メニューを組むが一年生から不満の声が出る。悩んだ絵里は、由美と共に病院を訪れる。何も話せずに帰ろうとした時、見舞いに来ていたライバル校の監督の「君たち、試されているんだぞ。」の言葉で、自主的、自律的精神の大切さに気付き、スイッチを切り替える。

三 展開例

○ 県大会で、一回戦の様子を観客席から見ている絵里は、どんなことを思っていただろう。

・坂先生がいない試合は不安だ。

・ライバル校は監督がいるのに、自分たちだけでやれるのか。
・試合中に困った時にどうすればいいのだ。

○ 一年生からの不満の声に、「いいの、これが城南の練習なんだから。」と答える絵里はどんな気持ちだったのだろうか。

・坂先生のノートのとおりに行っているのにどうしてだろう。

・坂先生がいたらこんなことにはならないのに。

・坂先生のいない部活をまとめるのはやはり無理だ。

◎ 「スイッチ切り替えよう！」と言う絵里は、どんなことを考えたのだろう。

・坂先生に頼っていいはだめだ。自分たちで何とかしよう。

・自分で考えて練習メニューも作り直してみよう。

・頼ってばかりで自分たちで考えなかった。

・先生に言われた通りにするだけでなく、自分たちでもっと進んでやろうとしなければ。

■ 「心のノート」の「自分のことは自分で決めたい」(二十六～二十九頁)を活用し、「自律」について考える。

四 指導上の留意点及び工夫

・本資料は、あくまでも自律ということを考えさせることが大切である。

ネット将棋 (1―3) 2(3年)

一 ねらい

誠実に実行し、その結果に責任をもとうとする道徳的判断力を培う。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

中学生の時期は、自主的に考え、行動ができるようになるが、一方では、自由の意味をはき違え、自分の行為が自分や他人にどのような結果をもたらすかを深く考えられない面も見られる。

スポーツには勝敗を宣告するレフェリーがいるが、将棋や囲碁は対局者の一方が自分の負けを宣言することで終局となる。対局者双方の自主性自律性が不可欠のゲームである。

本資料は、その自主性自律性を無視し、一方的に試合を中断させてしまう僕の人間的な不誠実さが道徳的な論点となっている。誠実とは、真心を持って他者に接する生き方である。

(2) 資料の概要

誠実な態度でネット将棋を楽しみ、実力を伸ばす敏和とは対照的に、僕はネット将棋を楽しめず、気分や感情に支配されて不誠実に振る舞っている。そうした折、智子や明子と話している敏和の「自ら『負けました。』」「目には見えない相手とどう向き合うかで、自分が試されてる気がして」という言葉を聞いて、三人が笑い合う中で、僕は一人笑えなかった。

三 展開例

- 一手一手に考え込んでいるふりをして、徹底的に時間稼ぎをしている僕はどんなことを考えているのだろう。

- ・ 負けを認めたくない。
- ・ 敏和に負けられるか。
- ・ なぜ、敏和がこんなに強くなっているのか。

- どう考えて、僕はネット将棋でいきなりログアウトしたのだろうか。

- ・ 相手が誰だか分からないし、また自分が誰かも知られていないからまあいいか。
- ・ 相手が弱くても強くても面白くないから。

- ・ こんなので敏和が強くなったなんてほんとか。

- ◎ 敏和のツッコミに明子と智子は笑ったが、僕が笑えなかったのは、どんなことを考えているからだろう。

- ・ ネットで相手が見えないからととんでもないことをしていたのだ。
- ・ 負けから学ぶということなんだ。
- ・ 勝ち負けでなく相手と誠実に対戦する姿勢が大切なんだ。
- ・ 相手が目の前にいるかどうかにかかわらず、いつでも誰にでも相手の立場を考えることが必要なんだ。

- 「心のノート」の「中学生だもの 自分がすることは結果まで深く考える」(二十八―二十九頁)を活用したい。

四 指導上の留意点及び工夫

- ・ ネット社会における匿名性は、ややもすると無責任で攻撃的な言動と結び付きやすいが、こうした機器を有益に活用するためには、他人の立場や結果に対する責任を熟慮した上で誠実に実行していくことがなければならぬことを深く考えさせたい。

違うんだよ、健司（2―3） 1〜2年）

一 ねらい

友情の尊さを理解し、友達を心から信頼して互いに励まし合い高め合おうとする道徳的实践意欲を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

中学生になると、悩みや喜びなどを同世代の友達に理解してもらいたいという気持ちが強くなる。また、集団の中で一人になることを極端に恐れ、互いに友達であることを常に確認しようとする。しかし、いったん得た友達を失うことを避けるために、表面だけ合わせて同調している場合も多い。本当の友達とは何かを考えさせ、相手の成長を心から願って互いに励まし合い、忠告し合える信頼関係を育てることの大切さを自覚させる。

(2) 資料の概要

僕のクラスに転校してきた健司は、僕が耕平に対して適当に合わせていることに対して「そんなのが友達と言えるか」と言う。生活が乱れがちになった耕平を心配して、健司は三人で親戚の家に遊びに行こうと誘う。そこで出会った健司の祖母とその友達の会話や様子を見て、三人は、友達とは本来どうあるべきかを知る。

三 展開例

○ ショッピングセンターで、健司に「そんなのが友達と言えるか。」と言われた僕は、どう思っただろう。

- ・別に普通じゃないか。
- ・堅いことを言うなよ。
- ・適当に合わせておいた方が気楽でいいんだよ。

○ 「いや、ちょっとな。」と耕平に言われた僕は、どうしてそれ以上聞かなかったのだろう。

- ・聞いてはいけないことなのかな。
- ・あまりたいしたことはないだろう。
- ・耕平が言わないのなら、別にいいか。

◎ 夏の大三角を見ながら僕はどんなことを思っているだろう。

- ・健司のおかげで本当の友達というものが分かった。
- ・適当な関係でいいと思っていた自分は、耕平にとっても健司にとっても本当の友達ではなかった。
- ・本当の友達っていいなあ。

- ・思うことを言える間柄っていいなあ。

■ 「心のノート」の「太陽みたいにから輝く生涯のたからもの」(五十二〜五十五頁)を活用し、「友情」について考える。

四 指導上の留意点及び工夫

- ・僕、耕平、健司の人物設定をはっきりさせておく必要がある。特に健司については、現実離れた「良い子」というイメージで読まないように注意する。
- ・板書は、三人のそれぞれに対する思いが一目で分かるように、図示するなどの工夫をするとよい。
- ・「本当の友達」という発言が出た時には、「本当の友達とは何か」と、再度問いを深めるとよい。

嵐の後に (2―3) 2～3年

一 ねらい

友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合おうとする道徳的実践意欲を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

今の子どもたちの友人関係は、表面的で非常にもろい状態であると言われる。本資料は、嵐という異常な事態に遭遇して心の中を打ち明け合う二人であるが、特別な時や場面だけでなく、日常の中においてもそのような願望があることを考えさせることが必要である。

(2) 資料の概要

子どもの頃から何でも話し合える仲だった勇太と明夫だが、高校生の頃から明夫が派手な仲間とつきあうようになっていく。水産高校を出てから定職につかないままの明夫を心配して勇太の親父が自分の船に乗せようとする。漁師見習いとして船に乗った明夫の仕事ぶりはいい加減でやる気が見えなかった。ある日、嵐に襲われ、危険と恐怖の中で、勇太が危険を顧みず明夫を助ける。これがきっかけとなって、明夫が心の内を打ち明け、勇太も「待ってっただぞ。」と二人の友情が確かなものとなる。

三 展開例

○ 親父に「上っ面だけで付き合ってるんじゃないぞ。」と言われて、勇太はどんなふうを受け止めたのだろう。

- ・ 浅い友達関係を見抜かれた。
- ・ 上っ面で嵐の海と一緒に乗り越えられると思うのか。
- ・ いざとなったら命をかけて助け合え。

○ 「ぐずぐずするなっ、波に飲み込まれるぞ。後は俺がやる、ブリッジに入れっ。」と言った勇太はどんな思いだったのか。

・ 明夫を死なせられない。

・ 俺が守らなければ。

・ 夢中だった。

○ 「待ってっただぞ。」と言うと明夫が「分かっただよ……、だから、戻ってきた、ここに。」と言う。この言葉を聞いた時、勇太はどんなことを思ったのだろう。

・ ずっと心配していた自分の気持ちは通じていた。

・ 自分がきちんと向き合えば良かったんだ。

◎ 顔を見合わせて、がっちり手を握り合った勇太は、どんなことを思っているのだろう。

・ 仲の良かった頃の二人に戻ったな。

・ 俺は本当の友達で在^あれた。

・ 親父たちのように助け合っ一緒に船に乗れる。

■ 「心のノート」の「太陽みたいにきらきら輝く生涯のたからもの」(五十二～五十五頁)を活用し、「友情」について考える。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 本来は、主人公の勇太で発問するが、「顔を見合わせて、がっちり手を握り合った」時の明夫の気持ちを問うことも、友情を深く考える一つの方法である。

言葉の向こうに (2-5) 1~2年)

一 ねらい

それぞれの立場を尊重し、いろいろなもの見方や考え方があることを理解して、寛容の心をもとうとする道徳的判断力を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

インターネットには友人や仲間、同じ趣味・関心をもった人々と多様な交流手段がある。中学生になるとパソコンを使用する機会も増え、関心のあるサイトを見付けて、ネットでの交流を楽しんだり、情報交換したりする経験をもつ生徒も出てくる。様々な情報を入手したり、顔の知らない人々と交流したりすることで、ネット社会の魅力を体験するとともに、様々なトラブルに出会うことも多くなるといえよう。

主人公が置かれたような状況は、ネット社会にアクセスしていれば誰もが経験するような出来事である。自分の発する言葉の先に、それを受け取る「顔を持った他者」がいると想像することで、ネット社会におけるよりよいコミュニケーションのためにはどうすべきかを考えさせたい。

(2) 資料の概要

主人公はヨーロッパのサッカーチームのA選手のファンで、インターネットでファン仲間との交流を楽しんでいる。ある試合をきっかけに、心ない書き込みが続いたことに怒った主人公は自分もひどい言葉で応酬して注意されてしまう。自分の気持ちが理解されないことで、あらためて顔の見えないネットでの言葉のやり取りの難しさや恐ろしさに直面した主人公は、読み手を忘れてしまっ

た自分に気付く。

三 展開例

○ 必死で反論する私の言葉がだんだんエスカレートするのはなぜだろう。

・ファンとしてA選手の悪口を言われっぱなしにできないから。

・ファンサイトに悪口を書くのは許せないから。

・売り言葉に買い言葉で、相手が見えない匿名だから書きやすい。

○ 「中傷する人たちと同じレベルで争わないで。」という書き込みを見て、私はどんなことを思っているだろう。

・悪いのは悪口を書いてくる方だ。

・負けてたまるか。

・私は悪くない。

◎ 画面から目を離して椅子の背にもたれた私は、どんなことを考えていただろう。

・読む人の気持ちをまったく考えていなかった。

・ネットのコミュニケーションって難しい。

・直接会って話している時よりも神経を使わなくてはならないのだ。

・ネットって言葉じりにこだわって、ゆとりをもって受け止められない。

・自分の言いたいことばかりになって相手のことをじっくり考えない。

■ 「心のノート」の「いろいろな立場があり考えがある」(六十三頁)を終末で読んで考える。

四 指導上の留意点と工夫

・いわゆるインターネット使用上のエチケット指導をねらいとするのではなく、道徳の主題(内容項目)をきちんと押さえる。

一 ねらい

多くの人々の善意や支えに気付き、それに感謝し、こたえようとする道徳的心情を高める。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

本資料は、主人公が野球部のキャプテンという設定で、キャプテンとしての役割・責任を果たそうとする場面が描かれているが、道徳的論点は、主人公がチームメートの温かい心に気付き、それに感謝するというところにある。

(2) 資料の概要

甲子園を目指してS高校に進学した主人公は、キャプテンとなった。新人戦で負けた後のチームのやる気のなさに部員たちを注意しとがめるうちに、みんなの心が自分から離れ悩む。そんな中、右肘を故障しプレイができなくなる。野球を止めようかとつづやいた時、父親から一喝され、自分のできることをして野球を続けようと決心した主人公は、部員を見つめ、世話をする。夏の大会を前にして思いがけず背番号10をもらう。この時起こるチームメートの温かい拍手によって主人公は、部員の善意や支えに気付き、それに感謝する。主人公は補欠のキャプテンとしてベンチ入りし、甲子園出場が実現する。

三 展開例

- 医者にボールを投げないように言われ、家への帰り道、僕にはどんなことが浮かんできたのだろう。
- ・ 何のために父の反対を押し切ってS高校に来たのか分からない。

・ これで甲子園は絶望だ。

・ 試合にも出られないキャプテンなんて存在意味がない。

・ 部員もやる気がないみたいだし、いっそのこと野球をやめようか。

- 「お前の野球に対する思いは、そんなもんだったのか。」と父に一喝された夜、布団に入ってもなかなか寝付けなかった主人公は、どんなことを考えたのだろう。

・ レギュラーになる、ならないということだけか。

・ 本当に僕は野球が好きなのか。

・ 裏方、支える人がなくては野球はできないのではないか。

- ◎ 深々と頭を下げた僕はどんなことを思っているだろう。

・ 監督。続けて良かったです。ありがとうございます。

・ 拍手してもらうなんて。僕が背番号もらったら、選手が一人少なくなるのにすまない。ありがとう。

・ 怪我をしたからこそチームプレイの意味が分かった。

・ 父さん、野球への思いに気付かせてくれてありがとう。

- 「心のノート」の「ありがたい心の贈り物に：」「『ありがとう』の思いを込めて」（六十四〜六十七頁）を活用して、自分を支えている人々について考える。

四 指導上の留意点及び工夫

- ・ 中心発問で「ありがとう」という言葉が生徒から出てきた時は、誰に対してのどういう「ありがとう」なのかを更に問うとよい。

帰郷（2―6） 2（3年）

一 ねらい

多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分があることに気付き、それに感謝し、こたえようとする道徳的心情を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

本資料は、主人公が故郷へ帰り、故郷の人々の温かさを知るといふ設定である。

中学生の時期は、自立心が強まり、自分の力を過信することもあり、自分の力だけで生きていると錯覚することもある。主人公が帰郷先で町の人々から感じたことに共感し、多くの人々の善意や支えによって、日々の生活や現在の自分があることを考えさせる。

(2) 資料の概要

東京で俳優となった主人公が、脳卒中で母親が倒れたという連絡を受け、故郷の病院へと急ぐ。夜遅く病室に着くと、子どもの頃からお世話になった老夫婦が母親を見守っており、母親の無事を告げられる。翌日、主人公は、老夫婦や母親が開いていた居酒屋の常連客の温かさに触れる。リハビリが必要な母親に東京で暮らそうと言うが、母親は首を横に振る。そんな主人公に老夫婦が、母親の面倒を見ると切り出す。町の人々と母親・自分とのつながり、人々の善意や支えに気付き、母親が離れたくないという町のぬくもりを感じながら、いったん東京に戻る。

三 展開例

○ 東京を出て、病室に着くまで、私は、どんなことを考えていただろうか。

・ 母は大丈夫だろうか。
・ 間に合うだろうか。

○ 老夫婦が病室に持つてきてくれたチャーハンを押し頂くように受け取った私の胸には、どんな思いがこみ上げてきたのだろうか。

・ 母だけでなく自分のことまで気遣ってくれてありがたい。
・ 大人になった自分に対して、子どもの頃と同じようにしてくれることへの驚きと感謝の気持ち。

◎ 来た道を引き返す電車の中で、優しさに包まれていると思っっている私は、どんな思いでいるのだろうか。

・ これまで自分のことしか考えてなかった。

・ おじさん、おばさんへの感謝の思い。

・ 常連客や雅也の優しさをありがたく感じる。

・ 自分一人で俳優になったと思っていたが、母や町の人たちみんなに支えられていたからこそこんなわがままができたんだ。

■ 「心のノート」の「ありがたい心の贈り物に：」（六十四〜六十五頁）の文章を黙読させるなどして余韻をもって終わる。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 最初の発問には余り時間をかけない。母の病気のことを心配していることが出ればよい。

・ 主人公が帰郷を通じて、自分たち親子を支えていたのは、老夫婦や町の人々の善意によることに気付くことが重要である。主人公の母親への感謝にとどまることなく、母親を支えている老夫婦や町の人々の優しさや町のぬくもりを感じて東京に戻る主人公の心の変化を感じ取らせる。

絶やしてはならない——緒方洪庵——(3—1) 1—2年)

一 ねらい

かけがえのない生命を尊重しようとする道徳的心情を養う。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

本資料は、猛威をふるう天然痘から人々の生命を救うために、粘り強く牛痘種痘法を広げようとする洪庵の生き方を描いている。盛んに長崎に蘭学が入ってくる頃に生きた緒方洪庵が、人々を天然痘から救うために、牛痘苗を待ち続け、分苗し、これを絶やしてはならないという思い、すなわち3—1(1)を道徳的論点として考えさせる。

(2) 資料の概要

江戸時代、天然痘で多くの生命が失われていた。当時の人痘種痘法は危険を伴うものだった。ヨーロッパで安全性と有効性が認められている牛痘種痘法があることを西洋の医学書で知っていた洪庵は、牛痘苗が日本に来るのを待ち続けていた。そこへ日本での牛痘種痘法の成功が伝えられ、洪庵は福井藩の痘苗を分けてもらうことになる。大阪での牛痘種痘は、接種すれば牛になる等人々の無知と反対勢力の誹謗中傷にさらされたが、洪庵はあきらめず、自腹を切つて、種痘をし続けた。やがて、牛痘種痘法の実績が上がるにつれて町の人々は変わり始める。

三 展開例

○ 甥と姪に人痘種痘を試みたが、腫れて発熱したのをみて、村の子どもには接種しなかったのはどうしてだろう。

・ 人痘種痘法は危険を伴うから。

・ 絶対に安全なものを用いたい。

・ 牛痘苗を使って生命を何とか助けたい。

○ 誹謗中傷にあつても、洪庵はどんな思いで接種する子どもを捜させたのだろう。

・ 種痘の苗を絶やしてはならない。

・ これで必ず命が救えるのは間違いないのだから。

・ 続けていたら、必ず分かってくれる人は出てくる。

◎ 門弟の言葉に目を細めてうなずく洪庵は、どんなことを思っているだろう。

・ これで子どもたちの命が救われる。

・ 天然痘の痕が残ったり失明したりする人もなくなる。

・ 家族が欠けることなくそろって生きていける。

・ もっと早く日本に入つて来ていたら死なずにすんだ人たちがいるのに。

・ 痘苗は、絶対絶やしてはならない。

・ まだまだこれから日本全体に広めねばならない。

■ 「心のノート」の「生と死について考えよう」(七十五頁)を活用することもできる。

四 指導上の留意点及び工夫

・ WHOは、一九八〇年に世界天然痘根絶宣言を出した。江戸時代には四割もの人々が天然痘に罹患しており、毎年人口の1%以上が減少するほどの猛威を振るつた。こうした高い感染率と死亡率から、天然痘は当時、原因不明の恐るべき伝染病と恐れられていた。

・ 洪庵は、「医の世に生活するは人の為のみ、己がために非ずといふ事を其業の本旨とす」と『扶氏医戒之略』に述べ、医者戒めとして

・ 事前に緒方洪庵の伝記等を読ませておくのもよい。

【写真提供】財団法人洪庵記念会

キミばあちゃんの椿 (3-1) 3年

一 ねらい

生命の尊さを理解し、かけがえのない生命を精一杯生きようとする道徳的実践意欲を培う。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

中学生の時期は、比較的健康に毎日過ごせる場合が多いためか、自己の生命の大切さを感じている生徒は少ない。また自分の悩みに閉じこもり、生命のかけがえのなさに思いが及ばず、生命軽視の軽はずみな言動につながることもある。本資料は、病弱な広瀬淡窓が、医師倉重の助言によって生き方を変えたのを知って、裕介がこれまでの生き方を変えようという構図である。「何のために生きるのかな、生きていても仕方がないのじゃないか」と苦しむ裕介が、人間の生きる意味について考え、生命を尊重しようとする生き方に変化するところを中心に考えさせる。

(2) 資料の概要

病気のために入院を繰り返している裕介は「何のために生きてるのかな、生きていても仕方がないのじゃないか」と悩んでいる。そんな裕介にキミばあちゃんは、同じように病弱で、自分の生き方を憂い悩んだ広瀬淡窓という人物と、淡窓の実践した「万善簿」を紹介する。裕介は淡窓の生き方を知り、自分の考えの甘さに気付く。

三 展開例

○ 裕介は、なぜ、「何のために生きてるのかな、生きていても仕方がないのじゃないか」と思ったのだろう。

・病気がちで入院退院を繰り返していて苦しい。

・親にも心配や迷惑ばかり掛ける。

・元気になれると言いつても、なかなか元気にならない。

・生きる意味が分からない。

・病気だからできることがない。

○ 裕介は広瀬淡窓の生き方や「万善簿」のことを知って、どんなことを考えたのだろう。

・僕と同じように病弱だったけど、意味のある人生を生きただ。

・健康であるか、病弱であるかは生き方には関係ないのだ。

・よいことをして生きることが大切なんだ。

◎ 裕介は、キミばあちゃんの手をぐつと握りしめて、どんなことを考えているのだろう。

・生きていても仕方ないなんて、考えていたけど、ちゃんと生きるよ。

・生命を考えさせてくれてありがとう

・病気に負けてはいけなくてよかった。

・自分だけが苦しいのではないだね。

・周りの人々が自分のことを気に掛けていることも忘れないよ。

■ 「心のノート」の「生命を考える」(八十四〜八十七頁)を活用し、生き方について考えさせる。

四 指導上の留意点及び工夫

・「生き切る椿」が象徴的意味を持っている。人間の生命のみならず、身近な動植物をはじめ生きとし生けるものの生命の尊厳にも気付かせたい。

闇の中の炎 (4-1) 1~2年)

一 ねらい

法やきまりの意義を理解し、遵守しようとする道徳的判断力を養う。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

中学生は、集団や社会における法やきまりの意義や大切さについて理解が進む一方で、法やきまりを外から自分たちに与えられたものとして表面的に従うだけになったり、自由な生き方を束縛するものと捉えて反発したりする傾向もみられるようになる。

本資料は、理沙が画集からヒントを得て絵画を制作しようとしたが、その途中から自分の行為が間違っているのではないかという意識が出てくる。ヒントを得ることが著作権法に違反しているかどうかということが問題ではなく、後ろめたさを感じる自分自身のだめだという意識が規範意識である。この規範意識を育てることが大切である。

(2) 資料の概要

コンクールに出す作品の下絵提出を控えて理沙は、アイデアが浮かばず苦しんでいたが、父に買ってもらった画集の版画にヒントを得て作品を構想する。しかし、作品が仕上がっていくにつれ、真似た気がして悩む気持ちが大きくなっていく。父にそれとなく相談した際に父が発した言葉から、自分がこの作品を完成させることはできないと、理沙は新たにスケッチブックに鉛筆を走らせる。

三 展開例

○ 締切が迫っているのに、理沙の筆を持つ手が止まりがちになるの

はどうしてだろう。

・ 人の絵を真似しているという声が聞こえてくる。

・ アイディアだけでもらつて、テーマも別のものだからいいと自分に言い聞かせても描けない。

○ 理沙はどう考えて、父に「有名な画家の作品を真似して描くのは悪いことじゃないよね。」と相談したのだろう。

・ 間違っていないと言ってもらおう。

・ 誰にでもあることだから気にすることないと保証してもらおう。

・ 自分のしたことを正当化したい。

◎ 夢中でスケッチブックに鉛筆を走らせる理沙は、どんなことを考えているだろう。

・ 自分がだめだと思うものはだめなんだ。

・ よいといわれても本当の自分の作品ではないものは出せない。

・ 完成できなくても、自分のものを描こう。

・ これでいいのだ。間違いない生き方をしよう。

■ 「心のノート」の「自由な世の中なんだから、他人に迷惑をかけるりゃいいじゃないかって…。」(九十二頁)という一文を取り上げ、本当にそれでいいのかと投げかける。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 規範意識を育てるためには、自分の中に確固とした行為の規準を持つことが必要である。「このぐらいいいじゃないか」と言い訳せず、「自分で自分を許せない」という主人公の生き方への共感を引き出すことによって、自ら規範意識を育てることの大切さが実感できるようにする。

仏の銀蔵（4―1） 2～3年）

一 ねらい

社会の法やさまじりの意義を理解し、規範意識を高めることによつて、秩序や規律のある社会を築こうとする道徳的実践意欲を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

本資料は、借金をごまかすこともできたのに、「貧しいが、盗人にはなりたくねえ。」「お天道様が見てござる。」と、借金を返す村人の規範意識に焦点をあてて考える。

(2) 資料の概要

高い利息をつけて金を貸しては厳しい取り立てをしていた銀蔵が、ある日、大切な証文綴りをカラスに持っていかれ、貸した金の取り立てができなくなる。証文綴りを返すから、賽銭箱に二十両を入れよという手紙の指示通りにしたが、証文綴りも金も返ってこなかった。しばらくして銀蔵が苦しい生活をするようになると、銀蔵を恐れ、憎んでいた人々が、証文綴りが無くても自分から借金を返し始める。不思議に思い、尋ねると「貧しいが、盗人にはなりたくねえ。」「お天道様が見てござる。」との答えにぼかんとする銀蔵だった。

三 展開例

○ なぜ銀蔵は二十両を賽銭箱に入れてでも、証文綴りを取り返そうとするのだろうか。

・ 証文が無いと人々が貸した金を払わないから。

・ 商売が成り立たないから。

○ いくら証文綴り突きつけても借金を払わなかった人々が一人ま

た一人と借金を返し始めたのはなぜだろう。

・ 銀蔵の姿をみてかわいそうと思った。

・ 証文綴りが無くても、借りたものは返すのが決まりで返さないと盗人と同じになってしまう。

・ 借金をごまかして、人の道に外れる生き方はしたくない。

◎ 「そうか、お天道様か。」と膝を打つ銀蔵は、どんなことが分かったのだろうか。

・ お天道様に恥ずかしくない生き方をしなくては。

・ 人間は本当はいいものなんだ。

・ 人々の苦しい生活ぶりとか人々の気持ちを考えずに自分の儲けのことだけしか考えていなかった。恥ずかしいな。

■ 「心のノート」の「縛られたくないのはみんな同じ」（九十二～九十三頁）を活用して、人々の規範意識の重要さに気付かせたい。

四 指導上の留意点と及び工夫

・ 金融業への批判に繋がらないように注意する。借金の取り立て、返済の請求を問題にするのではなく、銀蔵や人々の道徳的な心情を読み取らせたい。

・ 人々が、証文綴りが無くても自主的に借金を返したのは、苦しい生活をする銀蔵が哀れであったからではなく、借金をごまかすことが人の道に外れるという意識にあることを押さえたい。

・ 法やさまじりに従えばそれでよしとするのではなく、自分の内にある規範意識に従って行動しようとする道徳的実践意欲を育てたい。

鳩が飛び立つ日―石井筆子―(4―2) 2～3年

一 ねらい

社会全体に目を向け、よりよい社会の実現に努めようとする道徳的実践意欲を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

中学生になると、自らの所属集団を越えて、社会全体の在り方に向けるようになる。理想の社会を描くこともできるようになると同時に、現実の社会の醜さや問題点を目にして許せないと思う気持ちも強くなり、既存のものに対する反発だけが大きくなってしまいうこともある。しかし、そうした反発の背後には、よりよい社会を実現したいという思いが隠れている。本資料の主人公は、困難の中でも諦めず、よりよい社会の実現に向かって努力し続けている。その姿に出会うことで、進んで社会とかかわる積極的な生き方への意欲を引き出していきたい。

(2) 資料の概要

女子教育の充実に力を注いでいた筆子は、知的障害のある幼い二人の子どものことで心が晴れなかった。石井亮一から知的障害児教育の夢を聞き、共感し共に歩む決心をする。学園の火災で子どもたちを失ったことに強いショックを受けるが、子どもたちのために再び立ち上がり、自らの選んだ道を進み続ける決意をする。

三 展開例

- 筆子はどう考えて、これまで育ててきた女学校を仲間譲り渡し、亮一の歩む道とともに進もうと決めたのだろうか。
- ・ 亮一の夢を実現させたい。

- ・ 弱い人を助けるために私のことをやろう。
- ・ 娘たちや障害のある子どもたちに教育を受けさせたい。

- 娘の幸子が学園で描いた絵や作品を手にとって見つめながらどんなことを考えただろう。

- ・ 強くなろう。

- ・ 学園の子どもたちを守り育てるのが自分の使命だ。

- 火事の後、学園を廃止する決意をした亮一に黙ってうなずいた筆子はどんな気持ちだったのだろう。

- ・ 社会から見放された子どもたちを守れなかった。

- ・ 自分の使命と思っていたのは思い上がりだった。

- 筆子はどう考えて学園を続けようと決意したのだろう。

- ・ 学園存続を願っている人にこたえよう。

- ・ 自分が強い人ではなく、子どもたちに助けられていたことに気付く。

- ・ 子どもたちに居場所をつくるのだ。

- ・ 障害のある子どもたちが学び、働く可能性を開かねばならない。

- 「心のノート」の「あなたはどんなかたちで社会連帯を実現できるでしょうか」(九十八頁)と問いかけ、考えさせる。

四 指導上の留意点及び工夫

- ・ 筆子の福祉活動が、単に娘の居場所という個人的なものではなく、社会の中で弱い立場の者全てに視点を置いて活動をしたことを押さえる。

- ・ 事前に石井筆子の伝記等を生徒に読ませておくのもよい。

【写真提供】社会福祉法人滝乃川学園

ロックンローラー（4―8） 1～2年）

一 ねらい

地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努めようとする道徳的実践意欲を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

中学生の時期は、自分の住む地域社会に無関心であることが多い。本資料では町の将来に無関心であった主人公が、地域の人々の熱い思いに触れて、人々と力を合わせて魅力ある地域にしようとするところに焦点をあて、生徒に郷土愛を考えさせる。

(2) 資料の概要

浩美は、隣町に大型スーパーができることを聞き、これで商店街も終わりかと思ったが、家業のそば屋の出前先で本屋の潤ちゃんから町興しの企画に誘われる。大学の友達と一緒に話合いの会に参加し、ロックバンドを組んで大型スーパーと商店街の共存作戦を考えている潤ちゃんたちに触発された浩美は、自分も一緒に商店街のためにがんばろうと立ち上がる。

三 展開例

- 本屋の潤ちゃんから「友達集めろ。」と言われた私は、どんなことを考えていたのだろう。
- ・ 大型スーパーが出店して商店街が打撃を受けるのは仕方がない。
- ・ そば屋の跡継ぎになる気はないので、商店街にあまり関心はない。
- ・ 町興しをなぜ自分がやらなければいけないのか。
- ・ 潤ちゃんは何を考えてるんだ。

- 本屋の二階で話合いをしていて、私もだんだん楽しくなって、他の友達にも声を掛けようと思ったのはどうしてだろう。

- ・ 潤ちゃんたちおじさんの熱気に面白さを感じた。
- ・ アイディアがいろいろ出てきた。
- ・ 「昭和の若いもん」と「平成の若いもん」の世代を超えた話合いが意外と楽しい。

- ◎ 「銀転商店街四代目か。悪くないね。……よし。」といって立ち上がった私は、どんなことを考えていただろう。

- ・ おじさんたちには負けていけない。私もがんばるぞ。
- ・ おじさんたちと一緒に行動したら面白そうだ。
- ・ 時代の流れに逆らえないと思っていただけ、時代は自分たちがつくれそうだ。

- ・ 大型スーパーと共存する方法をみんなで探していこう。
- ・ 銀転商店街のこれからは一緒に切り開くぞ。
- 「心のノート」の「マっていました！」（百三十四～百三十五頁）を活用し、地域社会と自分の関わりについて考える。

四 指導上の留意点及び工夫

- ・ バンド合戦をやることで、急に商店街が生まれ変わるわけではないが、地域に生活する人々が集まって、共に考え、行動し続けることが郷土の発展につながることに気付かせたい。

真の国際人―嘉納治五郎―（4―10） 1（2年）

一 ねらい

世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立つて、世界の平和と人類の幸福に貢献しようとする道徳的心情を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

本資料の前半は、東京へのオリンピック招致に至るまでの嘉納のIOC委員としての努力が描かれている。後半は、嘉納の生い立ちから柔道の道と教育者の道について簡単に触れている。エピソードは嘉納の心が受け継がれ、東京オリンピック開催につながったことを書いている。国際理解としては、オリンピックを通して世界文化の創造に託した嘉納の思いを理解し、生徒が国際的視野に立つて世界の中の日本人としての自覚をもち得るように考えさせたい。

(2) 資料の概要

講道館柔道を創始した嘉納治五郎は、教師となり、様々なスポーツを通じて生徒の身体と心の錬成を目指していた。IOC委員を依頼された嘉納は、武道的精神とオリンピック精神が融合すれば、オリンピックが真の世界の文化になると確信する。たった二名の選手をオリンピックに派遣することから始め、日本開催を反対するIOC委員に流暢な英語で反論し、ついに第十二回大会の東京でのオリンピック開催を決めた。戦争によってそれは幻となったが、嘉納の心は受け継がれ、没後二十六年の一九六四年、念願の東京オリンピックが開催された。

三 展開例

- 嘉納は、どう考えてオリンピック招致運動に動き始めたのだろうか。
- ・ 日本国民の間にオリンピックに対する理解が広まっていた。

- ・ 欧米だけで開かれていたのでは、世界のオリンピックとはいえないから、ぜひ日本開催をすべきだ。

- ・ オリンピックを世界的な文化にするため。

- ・ 武道的精神とオリンピック精神の融合を図ろう。

- 嘉納は日本開催を反対するIOC委員を前に、どんな考えで反論をしたのだろうか。

- ・ ヨーロッパの都合を言っていたのでは、オリンピックは本当に世界のものにはならない。

- ・ 日本も遠方から参加しているのだ。

- ◎ 受け継がれた「嘉納の心」とは何だろう。

- ・ 日本でのオリンピック開催でオリンピックが真の世界文化になる。

- ・ 西洋と東洋の融合を図ること。

- ・ スポーツを通して心も体も向上するという信念。

- ・ 国や人などの差異を越えて、平和でよりよい世界をつくりたい。

- 「心のノート」の「日本人としての自覚をもって」（百三十六―百三十七頁）を活用し、世界の平和と人類の幸福について考える。

四 指導上の留意点及び工夫

- ・ 平沢和重は、元外交官で、当時放送局の解説委員。東京オリンピック招致スピーチは、怪我をしてドイツに出掛けることができなくなった人の代役であった。一時間の持ち時間のうち、スピーチに使った時間はわずか十五分。国語の教科書を片手に印象的なスピーチであったという。嘉納治五郎の氷川丸での最後の十一日を共に過ごし、語り合った人物がスピーチするという奇縁も紹介できよう。
- ・ 事前に嘉納治五郎の伝記等を生徒に読ませておくのもよい。

【写真提供】講道館 フォト・キシモト

海と空―樫野の人々―（4―10） 2～3年）

一 ねらい

世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って同じ人間として尊重し合おうとする道徳的心情を育む。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

国際理解の理想の実現のために基本となることは、どこの国の人々も同じ人間として尊重し合い、差別や偏見をもたずに公正、公平に接することである。本資料はトルコ航空機に救出された主人公が、エルトゥールル号遭難の際に樫野の人々が示した献身的行為を知ることによって、国際的規模の相互扶助を実感する。樫野の人々の思いとトルコ航空機の邦人救出に通底する精神の象徴的光景としての「海と空」が一つになった水平線に焦点をあてたい。

(2) 資料の概要

イラン・イラク戦争のさなかの昭和六十年、テヘランに取り残された邦人が二機のトルコ航空機に救出された。その中の一人であった私はなぜトルコなのか疑問を抱いたまま二十年が経っていた。トルコ人が親日的である理由の一つが、明治二十三（一八九〇）年、紀伊大島の樫野崎で座礁したエルトゥールル号の遭難事故にあることを知る。トルコ記念館を訪れ、樫野の人々が六十九名のトルコ人の救助・帰国を献身的に支えた事実が分かる。トルコ航空機による邦人救出に重ねて考えることで、ただただ危機に瀕した人々を助きたいとの共通の思いを、はつきりと意識したのであった。

三 展開例

○ 私は、なぜトルコ記念館を訪れたのだろう。

・トルコ航空機に救出されたが、どうしてトルコが飛行機を出してくれたのかを確かめるため。

・トルコが親日的である理由を確かめるため。

○ 「わしらもトルコの方も一緒じゃ。」と飼っていたニワトリを差し出した樫野の人々には、どんな思いがあったのだろう。

・困っている時に助けるのは当たり前。

・人の命に国の違いはない。

・同じ人間だ。

◎ 海と空が水平線で一つになるのを見つめながら、私はどんなことを思っているだろう。

・私の命は、樫野の人々によって今ここにあるのだなあ。

・二つの救出は、何の見返りも期待せずに危険に陥った人々を助けるようとする人間愛そのものだ。

・同じ人間として互いに尊重し合う心が世界平和に大切なことだ。

■ 「心のノート」の「世界の平和と人類の幸福を考える」（百二十八～百二十九頁）が活用できる。

四 指導上の留意点及び工夫

・資料への興味を高めるため、「樫野崎灯台」「船甲羅」「エルトゥールル号」「慰霊碑」「トルコ記念館」「沖周村長の日記」等の写真を提示して、臨場感に溢れた実話の世界に浸れるように工夫することもある有効である。

【写真提供】和歌山県串本町教育委員会

小学校第5学年及び第6学年	中学校
1 主として自分自身に関する事	
(1) 生活習慣の大切さを知り、自分の生活を見直し、節度を守り節制に心掛ける。	(1) 望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け調和のある生活をする。
(2) より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する。	(2) より高い目標を目指し、希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつ。
(3) 自由を大切にし、自律的で責任のある行動をする。	(3) 自律の精神を重んじ、自主的に考え、誠実に実行してその結果に責任をもつ。
(4) 誠実に、明るい心で楽しく生活する。	
(5) 真理を大切にし、進んで新しいものを求め、工夫して生活をよりよくする。	(4) 真理を愛し、真実を求め、理想の実現を目指して自己の人生を切り拓いていく。
(6) 自分の特徴を知って、悪い所を改めよい所を積極的に伸ばす。	(5) 自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求する。
2 主として他の人とのかわりに関すること	
(1) 時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接する。	(1) 礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとる。
(2) だれに対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にする。	(2) 温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもつ。
(3) 互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲よく協力し助け合う。	(3) 友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合う。
	(4) 男女は、互いに異性についての正しい理解を深め、相手の人格を尊重する。
(4) 謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にすること。	(5) それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなもの見方や考え方があることを理解して、寛容の心もち謙虚に他に学ぶ。
(5) 日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。	(6) 多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分があることに感謝し、それにこたえる。
3 主として自然や崇高なものとのかわりに関すること	
(1) 生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。	(1) 生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する。
(2) 自然の偉大さを知り、自然環境を大切にすること。	(2) 自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める。
(3) 美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ。	(3) 人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きること喜びを見いだすように努める。
4 主として集団や社会とのかわりに関すること	
(1) 公德心をもって法やきまりを守り、自他の権利を大切にしながら進んで義務を果たす。	(1) 法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、自他の権利を重んじ義務を確実に果たして、社会の秩序と規律を高めるように努める。
	(2) 公德心及び社会連帯の自覚を高め、よりよい社会の実現に努める。
(2) だれに対しても差別をすることや偏見をもつことなく公正、公平にし、正義の実現に努める。	(3) 正義を重んじ、だれに対しても公正、公平にし、差別や偏見のない社会の実現に努める。
(3) 身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす。	(4) 自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。
(4) 働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする。	(5) 勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める。
(5) 父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする。	(6) 父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く。
(6) 先生や学校の人々への敬愛を深め、みんなで協力し合いよりよい校風をつくる。	(7) 学級や学校の一員としての自覚をもち、教師や学校の人々に敬愛の念を深め、協力してよりよい校風を樹立する。
(7) 郷土や我が国の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。	(8) 地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努める。
	(9) 日本人としての自覚をもって国を愛し、国家の発展に努めるとともに、優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献する。
(8) 外国の人々や文化を大切にする心を持ち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める。	(10) 世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する。

○ 「道徳の内容」の学年段階・学校段階の一覧表

小学校第1学年及び第2学年	小学校第3学年及び第4学年
1 主として自分自身に関すること	
(1) 健康や安全に気を付け、物や金銭を大切にし、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする。	(1) 自分でできることは自分でやり、よく考えて行動し、節度のある生活をする。
(2) 自分がやらなければならない勉強や仕事は、しっかりと行う。	(2) 自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げる。
(3) よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う	(3) 正しいと判断したことは、勇気をもって行う。
(4) うそをついたりごまかしをしたりしないで、素直に伸び伸びと生活する。	(4) 過ちは素直に改め、正直に明るい心で元気よく生活する。
	(5) 自分の特徴に気付き、よい所を伸ばす。
2 主として他の人とのかかわりに関すること	
(1) 気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する。	(1) 礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する。
(2) 幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。	(2) 相手のことを思いやり、進んで親切にする。
(3) 友達と仲よくし、助け合う。	(3) 友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。
(4) 日ごろ世話になっている人々に感謝する。	(4) 生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する。
3 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること	
(1) 生きることを喜び、生命を大切にすることをもち。	(1) 生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にすること。
(2) 身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する。	(2) 自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にすること。
(3) 美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ。	(3) 美しいものや気高いものに感動する心をもつ。
4 主として集団や社会とのかかわりに関すること	
(1) 約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にすること。	(1) 約束や社会のきまりを守り、公德心をもつ。
(2) 働くことのよさを感じて、みんなのために働く。	(2) 働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く。
(3) 父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る。	(3) 父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくる。
(4) 先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しくする。	(4) 先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合って楽しい学級をつくる。
(5) 郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもつ。	(5) 郷土の伝統と文化を大切にし、郷土を愛する心をもつ。
	(6) 我が国の伝統と文化に親しみ、国を愛する心をもつとともに、外国の人々や文化に関心をもつ。

作成協力者（五十音順）

飯塚秀彦	群馬県伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校教諭
石黒真愁子	埼玉県さいたま市立春岡小学校教頭
荊木聡	大阪教育大学附属天王寺中学校教諭
植田和也	香川県教育委員会事務局東部教育事務所主任管理主事
鴨井雅芳	東京都目黒区立第三中学校主幹教諭
川上孝生	神奈川県相模原市教育委員会指導主事
五條しおり	埼玉県立大学教授
小林仁美	富山県立山町立雄山中学校教諭
齋藤直子	聖パウロ学園高等学校副校長
柴原弘志	京都市教育委員会指導部長
白木みどり	上越教育大学准教授
鈴木由美子	広島大学大学院教授
立花昭一	福岡県北九州市立沖田中学校主幹教諭
谷田増幸	兵庫教育大学大学院教授
西野真由美	国立教育政策研究所総括研究官
蘆原桂	山梨県甲府市立伊勢小学校教頭
藤永芳純	大阪教育大学名誉教授
水登伸子	広島県広島市立安佐北中学校教諭
横山利弘	関西学院大学教授

（職名は平成24年2月現在）

なお、文部科学省においては、次の者が本書の編集に当たった。

塩見みづ枝	初等中等教育局教育課程課長
美濃亮	初等中等教育局教育課程課学校教育官
澤田浩一	初等中等教育局教育課程課教科調査官

